

387
216

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 15^m 20^m 1 2 3 4 5

始



387-2/6



理學博士 横山又次郎著

珍談 百一篇

早稻田大學出版部藏版

大正
10. 4. 21
内交

東洋武士 山又丸 猿蓑



獅子狩

早稲田大進也 刺野原 敬



南米國大統領ルイスウエルト氏の獅子狩
獅子は最近の土人に飛び附いた



狩象の氏トルエヴスール領統大國米前
たしとんかゞとにさまは鼻の象

序

序

私は嚮に科學思想普及の目的で、智識の庫と世界の奇蹟との二書を著しましたが、幸に江湖の喝采を博しまして、私の目的も多少達せられたかと存じましたから、之に勵まされて同じ目的で更に此の書を著しました。しかし今度は従来と少し趣向を變へて、科學上の話の間に、古今の英雄・學者・文士その他の人々の面白い逸話を入れました。是れは同じ性質の話ばかりでは、讀者のお怠屈

を招くかと存じたからです。それは兎も角、今回も前の二書に劣らぬ高評を得たいと思ひます。

大正十年一月

著者しるす

珍談百一篇

目次

一	埋もれた寶の山	一
二	ナポレオンの朝食	二
三	人と犬との決闘	九
四	人の一生は苦、生れざるにしかず	二五
五	人は猿の生れ變り	二七
六	獅子も物の憐れを知る	三六
七	文明國の真中に妖怪騒ぎ	三九

八	人間の剝製	四九
九	オーストリア皇帝のお氣輕	五
一〇	驚くべき慧眼	三
一一	此の馬は短い	六
一二	絶壁の中邊に一晝夜間の立往生	六
一三	意氣地なしの弱追刺	六
一四	蟹の喰ひ合ひ	九
一五	象狩に出掛けて象に狩らる	九
一六	小姓の奇抜な悪戯	一〇
一七	水道の水と井戸の水	一五
一八	賣藥萬歳論	一三〇

一九	談話上手の鸚鵡	一五
二〇	海底の森	一七
二一	頑固な富豪	一五
二二	皇帝の慈愛心	一七
二三	大學者ニウトンの失神	一三〇
二四	數百尺の高塔から飛ぶ	一三
二五	蓄財宰相	一三
二六	紺色の薇薔の花	一三五
二七	吾輩は支那の大皇帝	一四〇
二八	前世界の海を荒した動物	一四二
二九	ナポレオンの武士道	一五〇

三〇 日本の子供……………一五五

三一 雄辯家の機轉……………一五九

三二 裝飾になる美しい鳥の羽……………一六一

三三 王の顔面に青痰を吐く……………一七〇

三四 手真似學の大先生……………一七二

三五 世界で一番南に住む人種……………一八〇

三六 敵人の義氣……………一八八

三七 短氣大使の暴舉……………一九〇

三八 褒の過ぎの害……………一九二

三九 野蠻國の王様……………一九二

四〇 四海兄弟論の實行……………二〇三

四一 敵の母親を大切にす……………二〇四

四二 卵のいろく……………二〇六

四三 狂人の忠告……………二一五

四四 歴山帝の面喰ひ……………二一七

四五 午睡かそれとも輕業か……………二二〇

四六 追剝團に狙はれた乗合馬車……………二二七

四七 坊主の狡猾……………二二三

四八 手足の一本もない癡兵……………二三五

四九 海底の藻屑となつた寶……………二三七

五〇 頭を抵當に金を借る……………二四八

五一 猫を吞せろと言つたお醫者……………二四九

五二 空中電車……………二五二

五三 兵士の帯剣木の籠に早變す……………二五六

五四 秋の蟲……………二六〇

五五 同じ勘定を三度取らんとした横着者……………二六四

五六 御者の敗戦……………二六七

五七 佛王の平民振り……………二六八

五八 乞食僧の王に呈した金言……………二七〇

五九 小羊を罠に豹を捕る……………二七二

六〇 北日本の寒さ……………二七七

六一 獨帝の深切……………二八六

六二 鐵道は斯くの如く布くべきもの……………二八八

六三 日光の儉約……………二九〇

六四 唄女の感冒王命で即座に治る……………二九七

六五 螢の話……………三〇一

六六 オブシナの大鍾乳洞……………三〇八

六七 一文なしの乞食年收一萬フランの店主となる……………三一八

六八 四百フランで雙の眞似……………三二三

六九 蝾を呑んだ大鰐……………三三七

七〇 フレデリック大王とナポレオン帝との三質問……………三三二

七一 動物園丁駱駝同様の取扱を懇願す……………三三六

七二 血の循環の悪い男……………三三八

七三 底知れぬ岩の割目に落込んだ話……………三三〇

七四 地球を貫通く穴に物をおとす試験……………三五二

七五 詩人の門番いちめ……………三五九

七六 天然の死……………三六一

七七 危険い商賣……………三六八

七八 プロシヤ王とホンガリーの法官……………三七二

七九 寒いのも寒くないのも心から……………三七四

八〇 恐しい大食の兵士……………三七五

八一 米國土人の芝居……………三七七

八二 經濟と寄附とは別物……………三八三

八三 馬の忠義……………三八五

八四 英國の皿屋敷……………三八九

八五 拳固を貰つて有難う……………三九一

八六 但し市長さんを除いて……………三九四

八七 象狩りと獅子狩り……………三九六

八八 現金な文士……………四〇〇

八九 象の足で造つた袋……………四〇一

九〇 強盗を巻く……………四〇四

九一 文身のいろく……………四〇六

九二 地の底で瓦斯の製造……………四二二

九三 珍しい木の空住居……………四二六

九四 奇態な結髪……………四三〇

九五 瓦斯代の嘘ほど安い所……………四三三

九六 銃聲は音樂、飲物は水……………四六

九七 馬鹿火の話……………四七〇

九八 一波の價一シルリング……………四三九

九九 納骨堂……………四四〇

一〇〇 人間の身體は缺點だらけ……………四四三

一〇一 不思議の現象……………四五七

(丁)

珍談百一篇

理學博士 横山又次郎著



埋もれた寶の山

一億五千萬圓の寶

ヨーロッパの大戦争の初めに、支那の青島から日本の艦隊に追ひまくられて、印度洋に落ち延びたエムデンと申す獨逸の軍艦がありました。此のエムデンはその後印度洋で無暗矢鱈に商船を撃ち沈めましたが、到頭英國の軍艦に見附かりまして、或る離れ島の方へ追ひ詰められて、此處でめち



ルベール人が黄金を穴にすくく

やくくに打毀されてしまひました。
 此のエムデンが憐れな最後を遂げた離れ島といふのはコーコス島と申し
 て、昔から一億五千萬圓の寶が隠してあるとの噂のある有名な島です。此
 の寶の隠し主は判然しませぬが、一説に今から約百年前にスペイン國の海
 賊が隠したのだとも申します。
 何にせよ大した高の寶ですから、これに目を着ける者が多く、去る明治
 三十五年には英國の金満家婦人二名がこれを聞き傳へて、探検隊まで出し
 て捜させましたが、かいくれ判りませぬでした。しかし今でも尙これを
 出して、一儲せんともくろんでゐる人が多數あると申します。

ダイヤモンドの島

先年西洋の新聞に奇態な記事が出ました。それはざつと次のやうでありました。

アフリカ洲の沿岸に秘密の島がある。ある時難破船の一水夫が此の島に漂着して見ると、その濱邊には、ダイヤモンドが砂や小石を蒔き散らしたやうに澤山あつた。それでその水夫はそのダイヤモンドを出来るだけポケットに詰め込んで、アフリカ洲に歸つて來た。これを見た人々は水夫に島の所在を言へとせまつたが、水夫は却々言はなかつた。その後その水夫は人手に掛つて死んだから、島の所在はとう／＼判らずじまひになつてしまつた。尤も水夫の懐中には島の所在を記した粗末な圖もあつたが、その圖があまり粗末なので、島を捜し出すわけには行かなかつた。

右の記事を読んだ人々の中には、半信半疑ではありますが、もしや眞正

かも知れぬと、窃にその島を捜してゐる者もあると申します。

六億六千萬圓の黄金

昔アメリカが発見された當時スペイン國からアメリカに流れ込んだ山師連は大した數でありました。此の山師連の中には、土人の金銀財寶を捲き揚げることを、その職掌のやうに心得てゐた者も澤山ありました。此不心得の者共が、メキシコ國に參りまして、大層この國を荒した後、南アメリカにも大富國があると聞きまして、其の中の一人のピザロと申す大膽不敵の者が手勢僅に百五十騎を率ゐて、今のパナマの港から船で南アメリカのペルー國に乗り着けました。

しますとペルー國は思ひの外立派な土地で、金銀の類も澤山ありさうな

ので、ビザロはほく／＼喜びまして、すぐに都のクズコに乗り込んで、スベ

イン國の使節と偽りまして、國王のグアファルコに謁見しました。

王はビザロを平和の使節と思ひましたから、自分の側に警護の兵も置かず、いと丁寧に歓迎してゐますと、ビザロは王の油断を見すまして、突然自分の従者に手傳はせて、王を引つ捕へ、豫て用意の馬にくゝりつけて、手勢と共に遠く都を去つてしまひ、都へは人をもつて「王が欲しければ身代金を出せ。」と言ひました。そしてその身代金といふのは吹いたも吹いたも恐ろしく吹いて黄金百十萬斤と吹き立てました。黄金百十萬斤とは今の金で一匁五圓としますと都合六億六千萬圓になります。

所が都の人々はさほどに驚きもせず、すぐに一萬一千頭の洋駝（駱駝）のやうな獸（けもの）を用意しまして、これに各百斤づつの黄金を着け、數十名の監

督者（とくしや）を擇んで、要求の黄金をビザロの方に送り出しました。

しますと一方ビザロの方では、自分で餘り吹いた爲に、都の者共は逆も之（これ）を聞き入れまいと早がてんしまして、王を殺してしまひました。それでこれを聞き込みました土地の人はこれは大變と都へ注進の爲め早打を出しました。その早打は途中で前の洋駝隊に出會ひましたから、監督人に王の殺されたことを傳へますと、監督人は大に驚きまして、「ビザロは身代金を要求しながら王を殺すとは不埒な奴だ、そんな奴なら今に此黄金をも奪ひ取りに来るに違ひない、これやつては耐るものか」と、すぐに大道から横路に這入つて、穴を掘つて、その中に一萬一千頭の洋駝の積んでゐた百十萬斤の黄金を皆埋めて、分らぬやうにしてしまひました。

此の事は當時の歴史にも載つてゐることで疑ふべき筋は少しもありません。



難破船の水夫の驚いたも道理濱の眞砂は
グアイヤモンド

ぬ。そして埋めた黄金はその後
何人もこれを掘り出したものが
ありませぬから、古くからこれ
を捜しに出かけたものはいくら
もありません。しかし一人も之を
掘り当てたものはありませぬ。
これは前の横路だけは知れてゐ
ても、横路のどの邊に埋めたか
が、さつぱり判らぬからです。
もし此の黄金を掘り当てたもの
があるなら、その者は世界一等

の成金になるでせう。

湖水の底に投げ込んだ黄金

是れも南アメリカの事ですが、コロンビヤ國にグアタビタと申す小さな
湖水があります。この湖水は昔土人が靈池と稱へて、その神様に供へる爲
に、時折舟で湖の中に入り出して、黄金の品物を投げ込んだ所です。そし
てこの投げ込んだ黄金は、これを取るものは忽ち神罰を被ると申して、誰
も引き揚げたものはありませぬでした。それでコロンビヤ國がスペイン人
の國となつてから、人が皆此湖底の黄金に目をつけて、時々その底を探つ
たものもありましたが、一人もこれを拾つたものはありませぬ。しかし土
人がこれに黄金を投げ込んだのは、大昔からの事ですから、湖水の底には

餘程澤山の黄金が溜つてゐるに違ひないと申します。

今から百年前に獨逸の地理學者のフンボルトと申す人が、この湖水の事を聞き傳へて、その畔に行つて見ますと、諸所に足場をかけた跡がありましたから、事によつたら、すつと以前に、誰かがこつそりと湖底の寶を引き揚げたのかも知れぬといふことです。

黄金の品物を湖中に投げ込む
コロンビヤの土人



(二) ナポレオンの朝食

巴里の朝の市街を微行する

今から百餘年の昔、佛蘭西の皇帝になりましたナポレオン第一世は都の巴里の市街を微行姿で歩くことが大好きでありました。そして、其の時は必ず鼠色のフロックコートを着て、その鈕子を上から下まで皆かけて、頭には緑廣の丸形帽子を被るのでした。

或る時ナポレオンはワンドーム廣小路の中央に一大記念碑を建てる工事を始めさせましたが、其の工事が却々大袈裟なので容易に捗進らぬのに氣を焦慮つて、自身にこれを檢分しようと思ひまして、或る朝早く、まだ夜も明けないうちに、近衛大將のヂウロック一人を連れて、例の微行姿で、

宮城を飛び出して、ワンドーム廣小路に着いたのが、東の方がやつと白み始めた時でした。

ナポレオンは工事なかばの記念碑の前に来ると、やゝしばらく穴の明くほどこれを見詰めまして、それから其の周囲を小一時間も往つたり來つたりした後「さあ歸らう。」とデウロック大將と共にナポレオン街（今は平和街と改名されてゐます）に出て、それから更に右に曲つてブルワールの大通りに抜けて、これを宮城指して行く途中、デウロック大將に向ひ、「巴里の市民諸君も餘程朝寝坊と見える。もう夜がすつきり明けて白日となつて居るのに、店といふ店はまだ一軒も開いてゐない。」と申しました。

それから支那風呂料理店（料理店の名で、當時東洋式の風呂でもあつたものでせうか）の前に参りますと、ナポレオンはその店のその少し以前に

ペンキを塗り換へて綺麗になつてゐたのにも眼が着いたものか、「どうだ、此處で朝食を食べては、今朝は早く起きて歩いたせいか、腹が大分減つて來た。」と申しましたから、大將は「陛下まだ早過ぎます。今やつと八時でございます。」と答へますと、ナポレオンは「ナニ、八時だつて？ 貴様の時計はいつでも遅れて居る。あゝ腹が減つた。」と申しながら、さつさと料理店に入つて、食卓の前に腰掛けて、羊肉のカツレットと青物入りのオムレット（オムレット、オー、フイース、ゼルブといふものはナポレオンの大好物でした）と外にシャンベルタンの葡萄酒とを取り寄せて食べましたが、ナポレオンも空腹の爲に大層おいしく感じまして、最後に飲んだ一杯の珈琲の如きは毎日宮中で飲んでゐるのより餘程おいしいとまで申しました。

喰ひ逃げと間違へられる

倍食事が済みますと、ナポレオンは給仕人に勘定書を持って來させて、すぐに立ち上り、これを拂へとデウロック大將に勘定書を渡して、自分は先きに表の入口指して行つて、その闕の上に立つて兩手を背後に組みながら、小聲で故郷の伊太利節(ナポレオンはもと伊太利人でした)を唄ひ初めて、デウロックの續いて來るのを待つてゐました。

一方デウロック大將は拂ひをしようと思つて紙入を出さうとしますと、紙入がありません。それでさては今朝餘り急いた爲に持つて來るのを忘れたかと氣が附きました。しかしこれをナポレオンに相談して見た處で、ナポレオンといふ人は微行の時でも決して身に金錢をつけてゐないことを知

り抜いてゐましたから、何の役にも立たず、如何したらよからうかと、ちよつと途方に暮れましたが、給仕人は傍に立つて仕拂(總計十二フラン)即ち我が四圓六十錢ばかり)を待つてゐますし、又表の入口のナポレオンは待たされた例のないことで度々大將の方へ向いて「何を愚圖々々してゐる。早くしないか。遅くなるぞ。」と急ぎ立てましたから大將も思案に盡きて、つかくつと帳場へ参り、そこに坐つてゐた店の女將に向ひ一禮して、いとも叮嚀に又言ひ悪くさうに申しました。

「私も友人も今朝家を出る時少し急いた爲に紙入を持つて來るのを忘れしました。それで申し上げ兼ねますが、暫時の間勘定を待つて下さいませぬか。今から一時間の内にはきつと持たして上げますから。」
 しますと、女將は嫌な顔して「貴方等は初めてのお客様で、お馴染では

ありませぬ。」と、暗に疑ひの氣味をほのめかして、更に下のやうに申しました。「毎日同じ様な手段で喰ひ逃げする人が幾らもありません。」
 これを聞いた大將は少し怫然として、「吾々は義理の堅い者です。近衛の將校です。」と申しますと、女將は「近衛の將校？ それは結構なお役目です。」
 と半分嘲るやうに申しました。

立て換へてくれた給仕人

この時傍にゐました前の給仕人は大將を氣の毒に思ひまして、女將に向かつて、「お客様は紙入をお忘れになつたとおつしやいますから、致し方がありません。それで私がおお客様の勘定を立て換へませう。お客様も私の

やうな貧乏給仕人に立て換へさせて置いて、それを知らぬ顔して返へされないやうなこともないでせう。」と申しながら、自分の巾着から十二フランを取り出して、これを女將に渡しました。

女將はこれを受け取りながら「お前そんな事をすればそれだけ損をするのだよ。」と申しました。

デウロック大將は思ひがけない給仕人の義侠心で、その場の難をのがれましたから、給仕人へは厚く禮をのべて、急ぎ表へ出て、待ち兼ねてゐたナポレオンに歩きながら前の話をしますと、ナポレオンも大に興がりました、高聲を出して笑ひました。

翌日デウロック大將から委細の命を受けましたその部下の一士官が、支那風呂料理店に參つて直ぐ帳場に通つて、女將に「昨朝フロックコート姿の

二名の客がこゝで朝食を食べられたでせう。あの一名はナポレオン皇帝陛下で、一名は近衛の大將デウロク閣下であります。その時勘定を立て換へた給仕人と呼んで下さい。」と申しますと、女將は喰ひ逃げと疑つた二名の客が高貴の方々であつたと聞いて、駭きのあまり忽ち顔色が眞蒼になりました。

やがて給仕人が來ますと、士官は委細の話をして、皇帝陛下からの下され物だと云つて、「當座の褒美として金一千フランを賜ふ。」と書いてあつた辭令を渡しました。

そこで給仕人の喜びは申すまでもありません。十二フランが一千フランになつたのです。そのみか數日の後には宮中に召し出されて、ナポレオン皇帝のお側附きに抱へられました。給仕人の名はデウルジャンと申しました。

(三) 人と犬との決闘

飼犬主人の横死を悲しむ

今から五百五十年餘の昔フランス王チャールス五世の家來に、オーブリー、ド、モンデデエーと申す武士がありました。此の人が或る時巴里から約二里半のボンデイ森の中で暗殺されて、その死骸も人知れず附近の木根に埋められました。

この不幸のオーブリーに、一頭の極めて忠實な飼犬がありました。この犬が、主人の死骸が木の根に埋められたと見るや否や、其の上には躊躇つて、數日の間、餒ゑて他へ物食へに行く時の外は、決してその場を動きませぬ

でした。

犬主人の死骸の所在を知らず

或る日の事、此の犬が突然巴里の、豫て主人が最も親んだ友の許に駆け附けまして、悲鳴を揚げて啼きました。固より、友は何事だか判りませぬから、多分腹でも減つたのだらうと、食物をやりますと、それを食べはしましたも、直に又啼き出して、門口の方へ行くかと思ひますと、後方を振り向いて、友人の續いて來ないのを見て、引返して、今度はその衣服の裾を咬へて引張りますから、友人も只事ならずと、こゝに初めて不思議に思ひまして、それから犬がそれ迄少しも主人の側を離れなかつたことや、その主人が數日來突然消え失せたことなどを思ひ合せて、これには何か秘密

があると思付きましたから、犬がするが儘に任せて行きますと、犬は友人をボンデイ森に案内しまして、とある木の根に止まつて、そこで切りに悲鳴を揚げて、且前足で地面を引掻いて、こゝを捜せといはぬばかりの振をしましたから、早速そこを掘りますと、果してオーブリーの無慘な死骸が顯はれました。

犬主人の敵を攻撃し始む

それから或る時期を経て、犬は偶然その主人を殺したマケールと申す武士に出會ひました。しますと、行きなりマケールの喉首目掛けて飛び附きまして、容易に離れませぬでした。そしてその後もマケールを見る毎に、一度は一度より猛烈に飛附きましたから、観る人は之を奇態に思ひますと

同時に、犬の主人とマケールとは豫てからその仲が甚だ悪かつたといふことも知れて来ました。それで自然オーブリーを殺したのはマケールではあるまいかとの疑も生じて来ました。

右の事は間もなく國王の耳に入りました。それで國王は之を容易ならぬ事に思召して、先づ事の實際を御覽の爲に、數十名の家來をおよびよせになつて、その中にマケールをも加へて、前の犬をお引き入れになりますと、初めは至極温順かつた犬が、マケールの顔を見るや、俄に相を變へ、齒牙を向き出して、マケールに飛かゝらんとしました。

神の裁判

是を御覽になつた國王は、さてはマケールも怪しいか、此の上は犬とマ

ケールとに勝負をさせて、事の眞否を判断するの外ないと思召して、所謂神の裁判を行はるることになりました。神の裁判とは斯ういふことです。便ち當時の習慣として、人に犯罪の疑が掛れば、疑つた者と疑はれた者(今日の原告と被告)とに一騎討の勝負をさせて、その勝負の結果で裁決をしたものです。そして當時の考へでは、罪あるものは神罰で、必ず負けるものと極めてありました。

勝負の場所はセイヌ河中のノートルダムと申す洲にきまりました。此の洲は今でこそ巴里の市街の眞中に在りますが、當時は郊外になつてゐて、附近の人家も極めて稀でありました。

犬の大勝利、犯人の白状

さて勝負の當日になりますと、昔の吾が國の仇討同様數千の見物人がノートルダムに集りました。

此の日のマケールの扮装は、軽い軍服に身を固めて、手に太い六尺棒を携へてゐました。又犬へは、物を持たせるわけには行きませぬから、その代に底を打抜いた樽をその危い時の隠家として、當てがひました。

聽て決戦は始まりました。犬はマケールの振り廻はす棒をいと巧に避けながら、或は前から、或は横から、或は背後から、マケールに飛び附かんとしまして、少しでも危くなるかと急いで樽の中に隠れ、一息ついて又出て飛び附くといふ次第で、稍小一時間も戦つてゐましたが、マケールも最初の程こそ、ヒラリ／＼と、犬の攻撃を避けてゐましたが、時が経つに連れて次第に疲勞れて、遂にその動作が亂れて來たのを附け込んで、犬は一飛

高く飛んで、マケールの咽笛に喰ひ附いて、美事之を横に振り倒しました。しますと數千の見物人は一度にどつと犬を褒めました。マケールも斯うなつては仕方がありません。王の前に跪つて、逐一その罪を白状しました。

(四) 人の一生は苦、生れざるにしかず

十七世紀中佛國に其の名を轟かしたモリエールやブアローの文豪を始め、其の他斯道の驍將數名が一夜オートイ(昔は村で、今は巴里市の一部)に酒宴を開きました。しますと酔が廻はるに連れて、各自萬丈の氣焔を吐いて、座席が甚だ賑になりました。

此の時ブアローが立つて「古人の言に、人の一生は苦なり。初めより生

れざるに若かず。不幸にして生る、則ち速にその命を絶つに若かず。苦と知つて生存るは愚なればなり。」といふことがある。諸君尤も至極ではないか。」と申しますと、一同は「ヒヤ〜尤も〜。」と嘸し立てましたから、ブアローは續いて「して觀ると、吾々が之を實行するのよからう。諸君も御同意なら、是れから早速一同打連れ立つて、河中に飛込みに行かうではないか。」と申しました。しますと此の時一同は既に十二分に酔つてゐましたから、何が何やら判らず、唯口々に賛成々々と言ひながら、ぞろ〜出掛けようとした時に、中の一名が「諸君鳥渡待ち給へ。今吾々が實行せんとする事は、天下晴れての壯舉である。之を夜の闇黒にしては價值がない。寧明日の白晝を待つて、河畔に集ひ、公衆環視の中でやつた方が、可いではないか。」と、さも得意氣に申しますと、一同も「さうだ〜、それ

がよろしい。すると今夜は此の世の見納めだ。まだ酒も残つて居る。飲め〜。」と、又々數十盃を傾けて皆酔倒れしてしまひました。

さて翌朝になりますと、豫定の場所に集まるものは一人もない所か、皆狐鼠々と逃げ歸つてしまひました。して觀ますと、孰れも前夜の大言壯語に似ず、苦と知つても生命を續けたいといふ意氣地なしに早變りしたと見えます。

(五) 人は猿の生れ變り

生き物はいろいろに變る

人は生物の中でも一等高く貴いものですから、萬物の靈とも申して、昔は造物主が特にお創造になつて、獸その他一切の生物の上に置かれたもの

だと思はれてゐました。所が近來段々學問が開けるに随ひまして、生き物は草木でも動物でも皆次第々に變化して、種々雑多の種類になつたものだとの説が生まれて、而もその證據がすん／＼擧つて來ましたから、今では少し學問をした人は皆此の説を信することになりました。此の説の名は進化論と申します。

野猪が豚になり狼が犬になる

生き物が、その境遇によつて、種々に變化する例はいくらもありません。牛は、西洋種は大きく、日本種は小さいのですが、もとは同じ牛から出たものです。それなら何故一方は大きく、一方は小さいかと申しますと、西洋ではその肉を食べたりその乳を飲んだりしますから、牛に美味しい食物を

第 四 圖 狢 第 五 圖 黑 猩 々



多量にやります。爲に牛はすん／＼大きくなるに引き反へて、日本ではもと之を力役にのみ使つて別段に滋養物も食べさせませぬから、次第にいちけて、小さくなつた次第です。豚は野猪の人に馴れたもの、犬は狼の人に馴れたもの、猫は山猫の人に馴れたものであることは、極々確實なことです。その證據には、これらを山に野放しにして置きますと遠からず本の野猪や狼や山猫に變化

してしまひます。

間の子動物

生き物の變化の證據はまだあります。それは二種類の間にどちらとも附かない、いはゆる間の子種のあることです。例へば、こゝに四角な貝と三角な貝とがあるとき、此の二つを見た時には、何人でも之を違つた貝としか見ませぬが、さて實際には、三角とも見えぬ、四角とも見えぬといふ形のものがあります。斯やうなものは四角貝だか、三角貝だか判りませぬ。その他三角に似た四角のものあり、又四角に似た三角なものもあるといふ次第ですから、詰まる所三角貝も四角貝も、本の先祖は同じで、それから或るものは少しづつ三角に似た形になつて終には立派な三角なものになり、

々 程 大 圖 六 第



造られたと思はれた人も、その實さうではなく何か之に似た動物の變つた

又或るものは少しづつ四角に似た形になつて、終に立派な四角なものにな

つたといふことに歸着します。斯やうな間の子形のもの、草木にも、動物にも澤山あります。

人と猩猩とは能く似てゐる

さて事柄がかうなつて見ますと、もと特別に創

ものではないかとの疑が起きて来ました。そして人に近い動物と申せば猿の外はありませぬから、先づ人の先祖は猿で、猿の生れ變りが人といふものではないからうかといふことになりました。

御承如の通り猿にも種々の種類があります、然し一等高等なのは狒々や猩々で、此の猩々にも本猩々、黒猩々、大猩々と三種ありますが、本猩々と黒猩々とは人より小さく、大猩々は人より少し大きく、そして人に最も似てゐます。

人と猩々との違ひ

人と猩々とは骨組などを見ますと、餘程能く似てゐまして智慧の上から見ても、猩々は獸物中で一等かしのいのです。しかし細に能く調べて見ま

人 原 圖 七 第



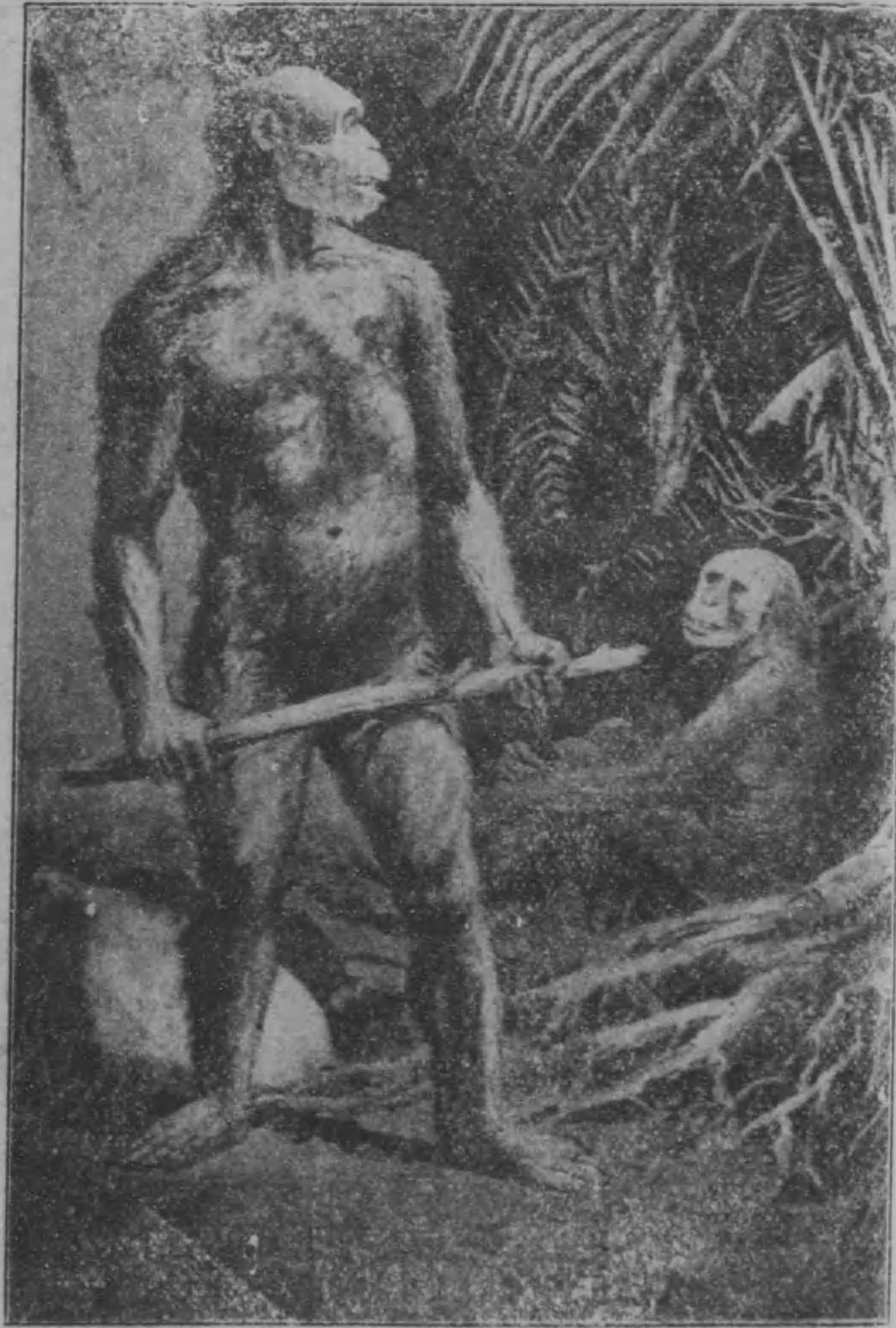
すと、猩々には人と大分違つた所があります。先づ物の道理を辨へず、善惡の區別を知らず、互に談し合ふ言語もありませぬ。それから骨組を見ますと、兩腕が馬鹿に長く、足も手のやうに物をつかむことが出来、頭は低くて脳漿が小さく、眼球の上

の骨が出つ張り、上下兩顎骨も前の方に出て、頤は後方に引込んで居り、
糸切齒は牙のやうで人のより餘程長いのです。

人と猩猩との間の子

斯やうに人と猩猩との間には大分違つてゐる所がありますから、唯人と
猩猩とを見ただけでは、人は猩猩の變つたものとは申されませぬ。しかし
ながら、もし此の間に、前に申し述べました間の子動物がゐますれば、無
論人は猩猩から出たものと申されます。然らば此の間の子動物はどうだと
申ますと、久しい間そんなものは見附かりませぬでしたが、近來になりま
して、その骨が地の底から掘り出されました。而もそれに三種類あること
が知れました。

像 の 人 猿 立 直 圖 八 第



第一は原人と申すもので、これは數萬年前には、多數ヨーロッパに住んでゐたもので、その頭骨を見ますと、今の人より脳天も低く、眼の上の骨も出つ張り、顔は猿に似て後方に引込んでゐます。此の物は人間には違ひありませんが、餘程下等で大分猿じみた所があります。

次ぎはハイデルベルグ人と申して、原人以前に獨逸に住み、まだ下顎骨しか發見されてゐませぬが、其の形から見ますと、原人より一層猿に近いのです。

第三は直立猿人と申すもので、是は最も古く、人といふより寧ろ猿と云つた方がよいと思はれてゐます。その頭骨の形は原人やハイデルベルグ人より更に一層猿に似てゐますから、直立猿人と云ふより直立猿と申す方がよいかも知れませぬが、その例へば猩猩と違ふ所は脳がこれより少し大き

く脳天の低さも、猩猩ほどではありませぬ。それからもう一つ著しく違ひますのは、その人間同様二本の足で直立して、歩行いたすことです、勿論猩猩その他の猿も直立することはできます。しかしこれは天然の位置ではありませぬ。天然の位置は四つ這ひです。人も猿に眞似て、四つ這ひになることは出来ませんが、これも亦天然の位置ではありませぬ。人は直立するのが天然です。前の猿を直立猿人と名づけたのも、人に似た猿で、而も直立したものだといふ意味からで、實に珍らしい猿です。斯やうに、人と猩猩との間に人に似た間の子や、猿に似た間の子が發見されて見ますと、もう人と猿とは其先祖は同じといふことは争はれませぬ。さあかういふ風になつて見ますと人の方は少し迷惑でせうが、お猿さんの方は大喜びに違ひありません。

(六) 獅子も物の憐れを知る

一度伊太利タスカニー公の動物園の獅子が檻から抜け出して、フロレンスの市街に逃げ込んで、大騒となつたことがあります。此の時獅子を見て逃げた人々の中に、小兒を抱いてゐた婦人がありましたが、餘り狼狽た爲に、其の小兒を落しました。すると獅子は忽ち之に飛び附いて、將に之を噛み殺さんとする刹那、母親の婦人は、急に引き返へして、怖さも忘れて、獅子の前に坐つて、大聲揚げて泣きながら、小兒を還へせと申しました。しますと、獅子は驚いた風で、暫時婦人の顔を見詰めてゐましたが、其の歎と涙とに動かされたものと見えまして、小兒を、之に少しも傷を附けずに地面に置いて、靜にその場を立ち去りました。

(七) 文明國の眞中に妖怪騒ぎ

化物騒ぎは西洋に少ない

妖怪・變化・幽霊などといふものは、世の中の教育が進むにつれて、次第に人が信じなくなるもので、西洋諸國のやうに、吾れより遙に早く教育の盛になつた所では、子供でもこれを信するものは吾れよりづつと少ないのです。その證據にはあちらの子供にお化の話をしかけても、多くは變な顔

つきをして、その話し手を見詰めるのみで、一向これを相手にしませぬ。しかるに大正八年の夏しかも教育の盛な米國に、お化騒ぎが持ち上つたことは意外千萬と申すの外ありません。固より此の騒ぎの持ち上るには、それ相當の理由があつたのであります。その理由は大略次ぎの通りです。

米國の化物屋敷

米國メイン州の都のオーガスタから東北の方七里の所に、ウキンズロウと申す人口約二千の小邑がありました。その町外れに、砂山と申す丘があります。その上には、クリントン通りと申す大通りがありました。その一方に、土地の木材會社で建てた長屋が數軒駢んであります。此の長屋は皆木造の二階建てで、丘の頂上から二番目の家には、キリオンと申す人が夫婦と

子供三人とで住んでゐます。その三人の子供の中で、總領は男子で名をジョセフと申し、既に二十歳の若者です。次ぎはアントイネットと申す女子で年は大正八年に十二歳でした。末の子はウキルフレッドと申すまだ當年三歳の男の子です。

着物が獨り押入から飛出す

八年の八月八日の午後女子のアントイネットと男子のウキルフレッドとがたつた二人で家に留守居をしてゐたことがあります。その時父親と兄のジョセフとは仕事に出掛けて、母親はちよつと町へ用足しに出掛けてゐました。そして母親は出掛けにウキルフレッドを二階の裏に向いた側の寢室の寢臺の上にねかして参りましたから、姉のアントイネットは弟の様子を

見^みに二階^{にかい}に登^あつて、そつと寢室^{しんしつ}を覗^{のぞ}いて見^みますと、子供^{こども}は心地^{こころ}よげにすや
くと睡^{ねむ}つてゐましたから、先^まづ安心^{あんしん}と室^{へや}を出^でようとする時^{とき}に氣附^{きつ}きまし
たのは、寢臺^{ねたい}の脚^{あしもと}下に墜^おちてゐた母親^{はは}の青地^{あそや}の袴^{はかま}と白地^{しろや}の中着^{なかぎ}とでありま
す。アントイネットは、十二歳^{じふにさい}とは申^{まを}せ、大層氣^{たいそうき}の利^きく女^こで「オヤ、マア、
母^{おつか}さんの着物^{きもの}がこんな所^{ところ}に放^{ほう}り出^だしてある。」と獨語^{ひとりごと}しながら、それを豫^{かね}
片附^{かたづ}けてあつた傍^{そば}の押入^{おし入れ}（奥行^{おくゆき}二尺幅^{ふたしやくはば}四尺^{しやく}）を開^あけて、例^{れい}の通^{とほ}り鉤^{かぎ}に引掛^{ひっか}
て、それから押入^{おし入れ}の戸^とを締^しめて、寢室^{しんしつ}の外^{そと}に出^でてその戸^とをも締^しめて、下^{した}に
降^おりますと間^まもなく目^めでも覺^さめたか、ウキルフレッドが泣^なき出^だしましたか
ら、急^{いそ}いで再^{また}び二階^{にかい}に上^あつて、寢室^{しんしつ}の戸^とを開^あけて中^{なか}に入^{はい}りますと、不思議^{ふしぎ}
にも其^そのすこし前^{まへ}に片附^{かたづ}けた着物^{きもの}が二枚^{ふたまい}とも又寢臺^{またねたい}の傍^{そば}に出^でてゐました。
アントイネットは薄氣味^{うすきみ}が悪^{わる}くなりましたから、急^{いそ}いで子供^{こども}を抱^たき上^あげて

着物^{きもの}はその儘^{まま}にして置^おいて、駈^かけ降^おりて、縁側^{えんがは}で子供^{こども}を抱^たきながら考^{かんが}へ込^こ
んでゐる所^{ところ}に、兄^{あに}のジョセフが歸^かつて來^きました。

二十歳^{ふたじふさい}の若物^{わかもの}が目前^{まへ}に不思議^{ふしぎ}を見る

それでアントイネットは待^{まち}つてゐたと言^いはぬばかりに、手早^{てはや}く前^{まへ}の不思議^{ふしぎ}
を物語^{ものがた}りしましたが、兄^{あに}は男子^{せんとこ}だけに笑^{わら}つて一向^{かう}に取り合^あはず、さつさと
二階^{にかい}に登^あつて、前^{まへ}の着物^{きもの}を押入^{おし入れ}の鉤^{かぎ}に掛^かけて、其^その戸^とを締^しめ又寢室^{またしんしつ}の戸^とを
も締^しめて、下^{した}に降^おりて、縁側^{えんがは}の椅子^{いす}にかけて、不安^{ふあん}の顔附^{かほつき}をしてゐた妹^{いもうと}を
慰^{なぐさ}め「何^{なに}に不思議^{ふしぎ}などがあつて溜^たまるものか。」と言^いひながら、獨^{ひとり}で笑^{わら}つてゐ
ましたが、それから約^{やく}二十分^{ふん}も経^たつてから「どれ／＼二階^{にかい}に行^いつて見^みよう。」
と申^{まを}しながらスタ／＼階段^{かいたん}に登^あつて寢室^{しんしつ}の戸^とを開^あけると、こはそも如何^{いか}に、

押入に仕舞つたばかりの着物が又ちやんと寢臺の傍に出てゐたばかりか、引き上げてあつた表窓の窓掛けまで全く下まで引き卸してありました。

これを見たジョセフは前の元氣は忽ち失せて、顔の色は眞蒼になつて、大急ぎで着物は押入に入れ、窓掛は引き上げて、飛ぶが如くに下に降りて、その足で隣家に行つて、その主人に不思議を話しましたから、その話は間もなく砂山中に擴がりました。

不思議が十數回繰返される

聽てキリオン夫婦も歸つて來まして、前の話を聞いて、早速二階に上りますと、前にジョセフが押入に片附けたといふ着物が二枚とも又々寢臺の傍に出てゐまして、窓掛も又引き卸してありました。

それでキリオン夫婦は着物は之を押入に仕舞ひ、窓掛は之を引き揚げて、下に降り、それから晩食を済ましてから、再び寢室を檢分しますと、不思議にも着物は又々飛び出してゐて、窓掛も引き卸してありました。之を見た夫婦は愈々驚いて着物と窓掛とは元々通りにして置いて、下に降り、早速その足で近所で二階の窓掛の見える家の人々に窓掛けが獨り手に下がるや否やに氣を附けて呉れと頼んで廻りました。

そしてその後その晩の内に着物が仕舞へば出、仕舞へば出ることが約十二回、近所の家でも、窓掛の下がるのを見たといふ人が幾人もありました。

不思議の正體は何か？

斯やうな次第でしたから、キリオン氏は膽の太い人であつただけに、どうしても不思議の正體を見顯はさすには置かぬといふ決心をしまして、單獨で寢室に入つて、その戸を締め、着物も之を押入に入れて、その戸をきちんと締めて、寢臺の傍の椅子に陣取つて、静に見張りをしておきますと、廳で押入の戸はスート獨り手に開いて、青地の袴と白地の中着とは獨り手に鉤から離れて、ふはくと空中を飛んで来て、寢臺の脚下に落ちました。此の間に人影は勿論妖怪幽霊などと思はれるものも見えませんでしたから、大膽なキリオン氏も今更のやうに驚いて仕舞ひました。

それで氏は考へました。事によつたら自分の視力が不完全で、正體はあつても、是を見ることが出来ないのではなからうか、それであるともう一人他の人を連れて来て、その人と一緒に見張をしたらよいかも知れぬと、

早速隣家の主人を引張つて来て、二人で眼を大きくして、四邊を睨み附けてみました。しますと今度はどういふ理由か一時間経つても二時間経つても又三時間四時間経つても、何の怪しいこともありませんでした。それで隣家の主人は全く騙まされたと思ひまして、キリオン氏にさんく小言を並べたのみか、氣でも狂つてはゐないかとまで申しましたから、キリオン氏は少し怫然として「そんなことは決してない。又故なく人を騙ます心もない。不思議を見たものは僕の外に妻と二人の子供もある。」と辯解しました。

さて此の化物屋敷の話は八年中は米國でも非常の評判でありまして、新聞記者なども、大分屋敷に出掛けて、實地を檢分したさうです。しかしその後は何の異變も起らないのでその儘になつてしまひましたが、しかし前

に記した不思議は決して造り事ではなかつたやうです。

類似の事が獨逸にもあつた

右の話は、去る明治三十一年一月に、獨逸バツリヤ國のキユップス村の、
ホフマンと申す經濟學者の家に雇はれてゐたバルバラ、レシユラウと申す
年若の下女の身邊に起つた出來事と鳥渡似て居ります。此の出來事と申す
のは、バルバラの四圍にある品物が獨り手に落ちたり轉んだり、飛んだり
したことです。その品物の中には、椅子のやうな大きなものもありまし
た。此の事は之を調査したウラルフラムと申す醫師の書いたものに殘つて
ゐます。此の時も理由不明で、その儘になつてしまひました。
斯やうな次第ですから、米國の化物屋敷の不思議も、一言に嘘だと打ち

消す譯にもゆきますまい。(獨逸の話は第百一に委しく出てゐます)

(八) 人間の剝製

女皇カゼリン二世の御宇に、露國に歸化の英人がありました。名をスタ
ランドと申して、餘程の金満家でしたから、自然皇室の金錢出納役を申し
附かりまして、女皇からも特別の優遇を受けてゐました。

或る日の朝下女がスタランドの居室に、さも惶急しげに参りまして「旦
那樣レリエフと申す警察署長が數名の巡查に家を取り卷かせながら、閣下
に會ひたいと言つてゐます。」と申しました。

スタランドは何事が出來したかと、不審に思ひまして、署長に會ひます
と、署長はさも言ひ苦くさうに、

「スダさん私は今日いや／＼ながら陛下の私にお下だしになつた命令を執行しに参りましたが、その命令の嚴酷いことは、お話しただけでも、身の毛が悚立つ程です。足下は何にか陛下の御機嫌を損ねる覺はありませんかと申しました。」

それでスダランドは「私ですか？ 私にはそんな覺は毛頭ありません。一體私を何うせよと仰せでしたか」と問ひ反しますと、

署長「どうも私にはそれを足下にお知らせする勇氣がありません。」

スダ「私は陛下の御信用でも失つたのでせうか。」

署長「それしきの事なら、何にも私が斯う弱る謂はれがないじやありませんか。信用は又恢復することも出来ます。」

スダ「それなら私を故國へでも追ひ返へされるお積りでせうか。」

署長「足下程金があれば、何處へお出にならうと御心配はないではありませんか。」

スダ「それなら西伯利亞追放でせうか。」

署長「西伯利亞なら又還れる日もあります。」

スダ「それなら入牢ですか。」

署長「牢も出られる日があります。」

スダ「それなら彼の嫌な革笞の刑でせうか。」

署長「革笞の刑は、重い刑には違ひありませんが、生命にかゝはるやうなことはありません。」

此の時スダランドは俄に驚きながら、

スダ「それなら私の生命を絶つのですか？ 噫、噫、二日前に御前に出た

時には、陛下はいろ／＼有り難いお言葉を賜はつたのに！ どう考へてもその命令といふのが判らぬ。署長さんさう何時までも隠くして置いて私をじらす必要もありませんまい。早く言つて下さい。」

署長「さう言はれるなら仕方がありません。思ひ切つて申しませう。」と如何にも弱つた顔付して「足下を刳製にせよと仰せられました。」と申しました。

是れを聞いたスダランドは喫驚仰天、須臾らく署長を凝視て、而も大聲で、馬鹿々々しいと言はぬばかりに、

スダ「刳製に？ まあ異な言を聞くものだ。それが正實なら、足下が狂氣して居るのか、陛下が喪神なされたのかに相違ありません。そして足下はそんな命令を黙つて御請けになつたのですか。私は鳥や獸類ぢやあるまい

し、刳製にされる謂はれがありません。人間を刳製にすることの慘酷は、常識で判りませう。」と怒鳴りました。

署長「さあ、それですから私も従来臣下として致したことのない抗議を申し上げました。私には逆もその様な殘忍極まることは出来ませぬ、どんな罪かは存じませぬが、幾重にも御慈悲の御沙汰こそ願ひますと、もう幾度も幾度も繰り返しましたが、私が申上ぐれば上ぐる程、陛下には逆鱗遊ばして、最後には、汝は朕が申附を執行する役目ではないか、口返事無用、さあ、即時こゝを退つて、朕が申附通りにいたせと、それは／＼厳しいお叱り。そしてその荒々しいお聲が、まだ私の耳に響いてゐます。實にいやはや何とも申しやうのない次第です。」と、署長も流石に萎れ切つてしまひました。

此の瞬時のスダランドは、見るも氣の毒な状でした。腹が立つやら、哀しいやらで、自暴自棄、地段駄踏んで、手を振つて、他目で見れば、どう見ても本氣の沙汰とは思はれぬでした。

今は署長も何と慰めやう術もなく、「さあスダさん時が経ちます。しかし此で足下に十五分間の猶豫を上げますから、最後の御用意然るべしでせう」と申しますと、スダランドは「嗚呼、絶體絶命、死に臨んでさう申しては女々しい様ですが、一通の願書を認めますから、嫌でも、それを陛下へ取り次いで下さい。」と哀願しましたから、署長も拒むに由なく、よろしいと承引しました。

署長は願書を請取るや直接宮中へは行かずに、宮中の事に慣れたブルース伯の許に馳せて一部始終を打明けました。

ブルース伯は署長を愚物ではないかと思ひましたが、兎に角自分に随いて来いと申して、直様参内して、署長を控所に待たして置いて、單身女皇陛下の御前に罷り出まして、事の次第を言上しますと、女皇は悲鳴を揚げて、「嗚呼何たる恐しいことぞ、レリエフは狂氣ばししたか、伯よ、一刻も早く、馬鹿署長をスダランドの許へ走らせて、同人を救してやると言はせなさい。あー、可哀相に。」と仰せられました。

ブルース伯は即時御言葉通りにいたしましたして、直に之を復命しますと、女皇は此の時初めて而も急に腹を抱へてお笑ひになつて、次ぎの通り仰せられました。

「伯よやつと事が判つた。その原因には今まで氣が附かなかつた。數年來朕が許に可愛らしい小犬がゐた。元英人から貰つたのでスダランドと呼ん

であつた。それが數日前に死んだ。それで惜しいと思つて、今朝レリエフに之を剝製にして置けと命じた。すると彼は様々なことを申して躊躇するから、彼れは屹度自尊心を起して、自分はそんな賤しい仕事を申し付けられる役ではないと、高く止まつたと推察したから、彼を少し荒く叱り附けてやつた。彼れは犬と人を取り違へてゐたのぢや。」と仰せられました。右の話は忽ち宮中に擴りまして、大笑ひの種となりました。日出度く。

(九) オーストリアや皇帝のお氣輕

驟雨に困つた徒歩の軍曹

今から約百五十年も以前に、オーストリアや國皇帝のジョセフ二世がプロクコートプロクコートの微行姿で、平服を着た従者一名を連れて、飾のない二頭立て

の馬車に乗つて、自身に手綱を取りながら、都ウィヤナの郊外に出られたことがあります。その歸途に、市街からまだ遠い所で、俄に驟雨が降り出しました。此の時軍曹の正服を着た一人の男が、往來を歩行してゐましたが、皇帝の馬車を見て、これと呼び止めましたから、皇帝は、その男の言ふがまゝに馬車を停めますと、件の男は馬車に近寄つて手をもみながら「實は私は此の俄雨で、進退谷つてゐる所です。といふのは、今私が着てゐます正服は仕立上りのほやくで、今日初はじめて着たばかり。これを御覽ごらんの通り雨曝あまぎしにしましては、折角の新調品しんてうひんもめちやくになるわけです。それで甚だ申兼ねましたが、お情に私を馬車に乗せては下さるまいか。」とさも言ひ悪くさうに申しました。

軍曹皇帝の馬車に乗る

これを聞かれた皇帝は「それは嘸かし難儀であらう。服も濡れては代なしになる。よろしい、早く此の車に乗り給へ」と申されましたから、男は大に喜んで、勿論皇帝とは知らずに、直にその側に飛び乗りました。それから皇帝は馬を駆けさせながら、次きのやうな面白い問答をなさいました。

皇帝「君は何處へ行つたのだ。」

軍曹「私の友人に皇帝陛下の御獵場の監視をしてゐる者があります。今日はそれを訪ねて参りました。」

皇帝「さうか。何にか面白いことでもあつたか。」

軍曹「はい、別に面白いこともありませんでしたが、珍しい御馳走を食べました。」

皇帝「それはよかつた。何を食べたか。」

軍曹「まあ何を食べたか、中てて御覽なさい。」

皇帝「それは少々六かしいわい。だがビヤ・スープでも食べたのか。」

軍曹「スープも食べましたが、もそつと、それより美味しいものも食べました。」

皇帝「それなら酸味カベツか」(是れはオーストリア人の大好物)。

軍曹「もそつと美味しいもの。」

皇帝「それなら犢の煮たのか。」

軍曹「もそつと美味しいもの。」

皇帝「それぢや、僕には逆も判らぬ。」

軍曹「足下、雉子ですよ。御獵場でそつと捕つた雉子ですよ。」
と申しながら、軍曹は皇帝の膝を手で軽く叩きました。

皇帝「フム―御獵場の雉子か。それは豪氣なものを食べたな。」

軍曹は皇帝と同乗したのに驚く

右のやうに談話が面白くなつて來た時に、馬車は市街に着きましたが、
雨はまだどしや降りに降つてゐましたから、皇帝は、軍曹に向かつて、そ
の住居をお尋ねになりますと、軍曹は「宅まで送つて頂いてはあまり冥加
に過ぎます。」と、遠慮しますから、皇帝は「何に構はないから宿所を言へ。」
と迫られましたので、然らばとその町名番地を申し上げ、且つ今日はお蔭

様で非常に助かりました。此の上は、何卒御身分と御姓名とを伺はして頂
きたい。」と申しますと、皇帝はニッコとお笑ひになつて、次ぎのやうに申
されました。

皇帝「今度は君の番だ。僕が何であるか一つ中てて見給へ。」

軍曹「勿論軍人でせう。」

皇帝「お察しの通り。」

軍曹「中尉でせうか。」

皇帝「もそつと上だよ。」

軍曹「大尉ですか。」

皇帝「もそつと上だよ。」

軍曹「大佐ですか。」

皇帝「もそつと上だよ。」

こゝで軍曹はちよつと驚きの氣味で、車内を見廻しながら「それなら大將ですか」と申しますと、皇帝は相變らず「もそつと上だ」と申されまして、同時にフロックコート of 鈕子をはづして、胸間の見るもまばゆき勳章を御見せになりますと、軍曹は目を廻さぬばかりに喫驚して「あゝ大變大變、皇帝陛下だ。」と申しながら、狭い馬車内に平身低頭、平蜘蛛のやうになつてそれまでの無禮をお詫びして、直ぐに飛び下りんとしました。

しますと、皇帝は笑ひながら冗談に「どつこい、さう甘くは行かない。君は僕の獵場の雉子を盗み食ひしながら、逸早く遁げ出さうとしても、君は僕の捕虜同然、行く所まで行かなければ、下ろしてやらない。」と申されで、軍曹の住居の前まで馬を馳せさせて、此處で軍曹を下しておやりにな

りました。

申す迄もなく、軍曹は皇帝のお氣輕なのに感泣しました。

(二〇) 驚くべき慧眼

或る時一人の乞食坊主がアラビヤの沙漠を通行しますと、突然二人の商賈に出會ひました。坊主は商人に、お前方は駱駝にはぐれたのではないかと申しますと、如何にもさうだと答へました。そこで坊主は更に其の駱駝は右の目が盲目で、左の足が跛ではなかつたかと申しますと、又さうだと答へました。

それから今度は、坊主がその駱駝は前歯が一本かけてはゐなかつたかと尋ねますと、かけてゐたと答へました。

それから又坊主は片側の荷は麥で、片側のは蜂蜜ではなかつたかと尋ねますと、又それに相違なかつたと答へました。

商人は斯くまで坊主が自分等の駱駝のことを知つてゐる以上、坊主は屹度その所在を知つてゐるに違ひないと確信しまして、その所在を尋ねますと、坊主は「拙僧は駱駝を見たこともなければ、それに就いて他から聞いたこともない、唯お前方との話でそれを知つたまでだ」と答へました。

それで商人は「此奴嘘を吐く。自分で匿くして置きながら知らぬ顔をするとは不埒な奴だ」と申して、忽ち坊主を縛り上げて、之を警察に突き出しました。

警察では坊主を厳しく詮議しましたが、嘘を吐いたといふ證據もなし、又駱駝を隠した證據もありませぬから、此奴は魔法道に違ひないと、そ

の積りで罰しようとしてゐますと、坊主は靜に口を開いて、警察官に向かつて、次きのやうに申しました。

拙僧は諸子の驚くのを見て、随分興味を感じた。又諸子が拙僧に嫌疑をかけたのも、一通りの理由はあると思ふ。しかし拙僧は決して悪事をする者ではない。拙僧は既に老年で經驗を積んで居る。故に此の沙漠中で、可なり能く物を洞察することが出来る。拙僧がはぐれた駱駝のあることは、その足跡で知つた。又そのはぐれたのであることは同じ路に人の足跡のないので知つた。駱駝が片目であつたことは、路傍の一方のみ草が食べてあるので知つた。跛足であつたことは一方の足跡が、他方のより淺いので知つた。前齒のかけてゐたのは、食べた草に、中央の所だけ、噛み切つてなかつたので知つた。荷に就いては、路の一方に、蟻がせつせく、麥

の粒を運んでゐて、その他方に、蠅が集つてゐたので知つた。
警察官は坊主の非常に慧眼なのに感服しまして。直に之を放免てやりま
した。

(一一) 此の馬は短い

今から大分以前に、佛國ヴェルサイユ宮殿の伶人に、ラランドといふ青
年がありました。至つて氣輕な性で、冗談めいたことが大好きでした。或
る時程遠からぬロンシャンにお祭りがあると聞いて、若くはあるし、飛び
廻ることは好きだし、前日になつて、ムッセと申す借馬屋に一頭の馬を
豫約しに行きました。

借馬屋ではあれこれと馬を擇つた後、一頭を借りることにして、借馬賃

十八フランの内、九フランを手附金に置いて、歸宅の途中一個の友人に會
ひました。その友人の話に「明日は四人乗りの馬車で、ロンシャンのお祭り
見に行く計畫があるが、君が仲間入りをすれば、人数が丁度四名になる、
どうだ一緒に行かないか。」と申しましたから、「僕も行くつもりで、今馬の
約束をして来たばかりの所だ。あゝ、あの手附を取り返へすことが出来れば
よいが。君、一緒に行つて呉れ、一つやつて見るから。」と申して、ララン
ドは友を連れて、ムッセの借馬屋に引き返しました。

借馬屋に着きますと、ラランドは「ムッセさん、さつきの馬をもう一度
見せて下さい。」と申して、その馬の傍に行つて「あゝ、ムッセさん、此の
馬は大變短いのですね——」と申しました。しますとムッセは「何と言は
れますか？ 馬が短い？」と申して「ラ」確に短い。それからラランドは更にその友に

向かつて、馬の背中を指しながら、「先づ僕が此處に乗つて、君がその後方に乗るとする。それからその後方に、デーグルモン（友の名）が乗るとして、モンドンビル（同じく友人の名）の乗る場所がない。」と申しました。

是れを聞いてゐたムッセは驚いた顔して「足下等は四人で乗るつもりですか。」と申しますと、ラランドは左様と答へましたから、ムッセは「さあ、此の手附金は持つてお出なさい。そして馬は他で借りて下さい。宅の馬はさういふ虐待者には貸されません。」と前の九フランを放り出しましたから、思ふ盡とラランドはその金を受け取つて、外へ出て、長い舌をペロリ。

（一一一） 絶壁の中邊に一晝夜間の立往生

三十年來、西洋諸國には、珍奇な鳥の卵を採集することが流行つて

ゐます。而も之を採集する者の中には、往々断崖絶壁に攀ち登つて、頗る冒險的の舉に出づる者もあります。左に掲ぐるのは其の一例で、即ち海岸に峙つ高さ數百尺の絶壁に、上から綱で下がつて、首尾よく目的を達して、喜び勇んで綱を手繰りつゝ登る間に、其の綱が岩角に摩れて、半ば断ち切れんとして進退維れ谷まつた、聞くだに戦慄すべき世界一品の實歴談であります。

千九百六年（我が明治二十九年）五月十六日は私が九死に一生を得た忘れんとしても忘るる事の出来ない大切な日です。私は此の日正午を少し過ぎた頃、手には一束の綱を下げ、肩には一個の魚籠を掛けて、アイルランド國アラン島のメンロス崖と云ふ此邊切つての高い岩壁を指して急ぎました。此の岩壁は海に面して直立六十五丈、其の面には所々に岩の小突起があつ

て、上から下がる者の爲には多少の足場とならないものでもありませんが、しかし皆極めて危険なもので、安全と思はれるものは無論一もないのです。然るに此の岩壁の中邊には、一の大龜裂がありまして、其の中には鵜、鳥、鳶、鷲などの巢があることは豫て私が友人のトムから聞いてゐたことです。そこで私は不圖島人(アラン島の住民)を出し抜いて、其の巢に在る筈の卵を採集するのも亦一興であらうと、詰らぬ考を起して、さてここ此の岩壁を指して急いだのであります。

私が絶壁の一端に達して、其の上に駆け登つた頃には、天に一朶の雲もなく、空氣は静で風もなく、暑からず寒からず、肌合最も好く、且つ海は前面は遠く連つて無限の鏡面の如く、東方に見えたモヘルの岩壁は日光を反射して白く輝き、南の方地平線上に横るブランドンの山影は黛のごとく

長引いた光景は宛然繪畫の如く如何に無風流な私でも、暫時は見とれて進むことが出来なかつたのです。しかし何時まで見ても飽かぬ景色と諦めて、更に足を轉じて龜裂のある岩壁の上に着いた頃は既に四、過ぎかと思はれました。そこで私は手早く手に提げてゐた綱を解いて、其の一端を手に近にあつた御影石の大塊に確と巻きつけ、次ぎに肩の籠を下して上着とチヨツキ、それに靴と靴下とを脱ぎ棄てて、次ぎに腹に革帯を締め、再び籠を背中にかけて、準備が全く整つたので、崖邊に近寄つて綱を下に垂れて見ますと、海面から五六尺の上まで達しましたから、是れなら大丈夫と獨り心の内で満足しました。

私は實の所崖下りには、餘り經驗がなかつたのです。即ち今までに之を試みたことが僅に五六回、而も何時でも、數名の友と一緒に手傳つて貰つ

たのでした。又綱も幾條も携へて、下がり綱の外一條は必ず其の一端を自分の腰に纏ひ、その他端は之を上の方の友に渡して、不意の出来事に備ふる要心をしたものでした。しかるにその時は自分一人なので、そんな事はもちろん出来ませぬでした。

さて愈下がるといふ時に當つて私は附近一帯の地を見廻はしましたが、此の時海鳥の矢の如く飛び来り飛び去るものと、數町離れて靜に牧する一群の羊との外、生き物といふ生き物は一も見えませぬでした。そこで私は直ぐに崖邊に近い、背中を海の方へ向けて、蹲踞んで兩足を崖の側面に垂れ、兩手でしかと綱を握りながら、徐かに下り始めましたが、初めの一丈二三尺の間は、岩面が全然平滑で、足の指を持たせる岩角もなく、體重の全部を綱に持たせるの外なかつたでしたが、下るに随つてそこそこ、に岩

角もあり、約三丈も下には、壁面に幅四寸から六寸ぐらゐの長く横に連つた段までありましたから、やれ／＼嬉しやと私はその上に立ち止まつて、手には綱を握りながら、休息すること數分間、それから下を覗いて愈よ龜裂の所在を確かめました。一體崖下りの折りには、下を視ることは大々の禁物である、といふのは之が爲に氣の弱い者は往々目を廻はして、それなり精神錯亂して、眞逆様に墜ちないとも限らないからです。私は勿論目の廻るやうなことはなかつたでしたが、しかし餘り良い氣持ちもしなかつたです。充分神氣を休めて、それから再び輕業師の如く綱を下がり始めまして、約十二分間もすると首尾能龜裂に着きましたので、早速其の間に這入らうとしますと、口の所は甚だ狭く、四つ這ひになつても非常に困難ではありましたが、一所懸命になつて終に這ひ込みますと、中は却々廣くも

あり、又高くもあり、直立して充分闊歩することが出来るやうな大穴でありました。

私が龜裂の中に入り込むや否や、直に鳥の羽搏きの音がして、一羽の鴉と一羽の大鷲とが私の頭を掠めて、口の方に飛び去りました。しかし中は眞暗で初めの中は何物も見えなかつたのですが、慣れるに随つてまだ飛び得ない若鳥が數羽ゐるのも見えましたから、もし卵がありはしないかとあちらこちらを見廻しましたが一個も見當らず、其の内最も奥の方の岩の凹んだ箇所極めて奇麗な鷲の卵二個を見付けましたから、しめたと思つて取るや否や直に之を籠の中に入れ、尙外にもありはしないかと岩の窪みを隈なく捜して見ましたが、到頭一個も見當りませぬでした。其の内約一時間半もたつたかと思ひましたから、歸りが遅くなつてはと思ひまして、後

戻りして出口を出る時には貴重な獲物に傷をつけないやうに非常な要小心をして、直に綱を傳うてまた登り始めました。

一體崖の綱上りは極めて危険な業には相違ありませんが、慣れて見れば人の考へる程でもありません。かゝる時に最も大切なことは、綱の丈夫なこと、腕のしつかりして居ること、此の二つさへ大丈夫であれば、何も心配する事はありません。私はその時二つとも大丈夫だと思ひましたから、危険と云ふことは少しも念頭に浮ばなかつたのです。さて私は天と地との間にぶら下がらつゝ、岩面傳ひに次第に登りましたが、此の間私が一心に考へてゐましたのは、途中に岩の割目があつて、その間に卵でもあればよいがといふ慾の方ばかりでした。其の内私は頂上から二丈ばかりの所まで登り詰めました。是れから上は前にも申した通り岩面が全く滑

か、體重の全部を綱に持たせなければならぬ所でありました。此の時私が不圖上を見ますと、こはとも如何に、芋の絲を幾筋も繕つて作つた綱が上の岩角で摩れて、半ば断ち切れて、僅僅三筋になつてゐました。私は之を見ると思はず全身に冷汗をかいて身震ひしました。

嗚呼私は馬鹿なことをしました。私は下る時に餘り急いで、綱と崖角との間に着物なり何なり柔い物を挟んで、摩擦を防ぐことを忘れてゐました。しかし後悔先きに立たずで今更仕方がありません。私は上を睨んだ儘、殆ど爲す所を知らなかつたのです。登らんか、身體の全量を綱に持たせなければならぬ。すると切れるのは必定。切れば下は千尋の底——と思はず足下を見下せば、六十餘丈の上の事として、岩打つ波もほんの微にしか聞えませぬでした。私は進退谷まりました。如何したら——と、思案に暮れま

した。その時に下を見てふと氣の附いたのは、前に休んだ狭い段でありました。兎に角あの段まで戻りしよと決心しまして、今度は最初の勢に似ず、恐々ながら、有りと有らゆる岩角に足先をかけて、出来得るだけ綱に力を入れずに、静々となめくじの這ふやうにして、下つて行きました。が、此の間に神経の故か、切れたと思つたことが二三回もありました。から、苦しい時の神頼み、一心不亂に天帝の加護を祈つて、やつとの事で段まで下りました。此の間は多分二三分時間にしか過ぎなかつたでせうが、私には殆ど永久のやうに思はれました。そして私の額には玉なす汗が一杯に滲み出てゐました。

此の時私は此の段まで無事に下り得たのは全く天帝の加護だと思つて、天帝に謝しました。しかし又翻つて此の新位置の如何なるものかと思つ

て見ましたら、却々安心が出来ませぬでした。と云ふのは段とは云へ、幅は勢々五六寸しかなし、然も顔を岩に向けて立つたきり、怖くて身動きも出来ず、實に心細い次第であつたからです。私は幾度も誰れか来て助けて呉ればよいと思ひましたが、元來アラン島は淋しい所で、私が今居る所はその中でも殊更に淋しい所でありました。此の邊數里の間は人家といふものは一軒もなく、随つて人の此の邊に来る望も殆んどありませぬでした。

私は心中で思ひました。人が此の邊に来合すのは數日の後であらうか、數週間の後であらうか、崖に巢ふ鳥狩の期までには、まだ三週間もある、此の邊の海で漁業の始まるのも尙五六週間もある、耳ならず此の崖下を通る舟などは殆どない、無いのも無理はない、此の邊は人の來る要のない所

である。それに間の悪い時には悪いもので、私が此の崖に居ることを知つてゐるものは一人もない。若し私の此の邊にゐることを推察する者があるとすれば、それは友のトムだけであるが、折悪しく此の男も今は旅行中だ。とさう考へて見ますと、救ひの人を待つ愚なことを悟りましたので、度々大聲を揚げて救ひを求めて見ましたが、其の都度之に應へたものは岩壁から反響した山彦のみでありました。

其の内顔を岩に向けた位置が非常に苦しくなつて来て、迎も長續きはしなと思ひました。それで私は意を決して、身體を海の方に振り向けようと試みました。是れは餘程の困難でありましたが、やつとの事で成功しました。それで今度は背中で岩に寄り掛つて、右の手にしつかりと綱を握つてゐました。

斯う云ふ場合に時の経つのは非常に長いものであります。一日千秋といふこともありますが、斯かる折には一分間千秋とでも言ひたいやうです。私は度々上を仰いでみましたが、人影らしいものは一度も見えませぬでした。又度々海面をも睨みましたが、一隻の小舟も見えませぬでした。私は又度々斯かる苦しい位置にゐようより、寧ろ切れ掛つた綱に頼つて、運を天に任せて登つて見ようかとも思ひました。が、しかしさて愈々となると、其の勇氣も出ませぬでした。時は次第に経つて、太陽は西海に没しました。其の後は唯さへ静な所が一層静になつて、岩に激する波の音と時を求むる崖鳥の啼き聲とが一層強く聞えだしました。それから間もなく日も暮れて、夜風が吹くと共に非常に冷氣を催して來ました。そして上着もなく、チヨッキもなく、足も丸出

してしたから、非常な冷氣を感じだしました。それから露が下り始めると衣服はおろか骨まで潤ひました。是れが既に私に取つては大した苦痛でしたが、是れより一層私を苦めたのは餓でした。朝食後何ひとつ口にしてゐなかつた私は海上の新鮮な空氣に一層の空腹を覺えました。夜が次第に更け行くと共に寒氣は彌や増し、腹は益減つて來て間歇熱にでも罹つたやうに、私は全身震ひ出しました。それで私は斯んな有様ではその内必ず弱つて、遂に海に墜ちるに違ひないと思ひました。それだとすると成るべく身體を安全にする爲に、段に腰を掛けるのがよいと思ひまして、綱をしつかと持ちながら、徐に踳踳で、兩足を崖に下げて見ました。すると段は狭く背は硬い岩であるに拘らず、身體が百倍も樂になつたやうな心地がしましたので、今度はズボンの隠しに手を入れて、噛み煙草を取

り出し、餓を鎮めるに或は良いかと思つて、其の一片を口に入れました。しかし又茲に大心配となつたのは若し少しでも居眠りをしたら忽ち海中に落ちるかもしれない事でした。そこで私は如何な事があつても眠るまいと決心して、交々暗い海面と星の耀く天とを見詰めましたが、其の内疲れと餓とは私の意思に打勝つて、動もすれば私は頭を背後の岩に凭れようと思つたから、これではならぬと眼を見張つて見たり或はこすつて見たりしましたが、睡魔の力は中々に強く、遂に私は眠るが如く眠らざるが如く、半睡半覺の状態に陥つて時の経つのも知らなかつたのですが、鋭い鳥の啼聲に驚かされてきつと眼を開いて見ますと、東の地平線には微光を湛へて、夜は將に明けむとする模様でした。この時私の氣附いたのは、半ば夢中の時でも、私の手は綱を固く握つた儘少しも之を弛めなかつたこと

でした。それから又私の身體は骨まで凍えたかと思はれるほどに冷えておきました。そこで私は徐に腕を伸ばして、手で之を摩擦して、血液の循環を計り、それから又段の上に直立して、背中を岩に持させ掛けました。日出の少し前になつて、私は再び非常な空腹を感じましたから、採集の卵に手を掛けようと思つましたが、是れだけは最後の最後まで助けようと思ひ返しました。又私は度々登つてみようかとも思ひましたが、しかし切れればそれまで故出来るだけ辛抱するのが最良の策と諦めました。それから愈々太陽が地平線から昇るまでの間は僅かばかりではありましたが、私には數十時間のやうに思はれました。やがて太陽が紅の光線を雲間から輝かして、次第に高く昇つて、南の方位に廻つた頃には、雲も霞も皆散じて、一天拭うたやうに蒼空を現はしました。すると今度は日光の熱

が堪へ難くなりまして、餓といふ苦痛の上に更に渴といふ苦痛が加はつて來ました。又背中の岩壁も、素足で立つてゐた岩面も煖けつくやうに熱して、身體が焦げはしないかと思ひました。私は幾度も岩の上で人聲がするやうに思ひましたので、其の都度救ひの聲を揚げて見ました。そして耳を澄まして答を待つてゐますと、自分の聲の反響する外には何にも聞えて來ませぬでした。私は次第に心細くなつて、意氣全く銷沈しました。今夜も亦此處で夜を明かすのかと思ひました時には、寧ろ運を天に任せて、切れ掛つた綱でも登つた方がよいかとも思ひました。

一度私は崖の上を見上げて、胸の俄に轟いたことがありました。といふのは、上から何か下を覗いて居ますから、やれ嬉しやと、能々見ると馬鹿らしい一頭の羊でありました。嗚呼何の事だと一時浮き立つた心も又々沈

みました。

それから午後二時頃と思はるる頃までは何の變つたこともありませんでした。私の眼を遮るものは同じ景色の海面で、私の耳に達するものは同じ單調な波音でありました。立ちづくめて疲れ果てたので私は又腰を掛けました。

太陽は次第に傾き始めました。此の時刻にかしら私の耳に囁くものがあるやうに思はれました。その聲は「日暮まで汝を救ふ者が來なければ、汝は明朝を俟たずして、あの世の人となり終るぞ。」といふやうに響きました。

今度は餓より渴が一層私を苦しめだしました、喉は火で燬くやうに熱し、舌は乾いて動かすことが出来なくなりました。それに頭痛がして眼も殆ど眩まんばかりでした。それで私は腰を掛けた儘身動きもせず、目を閉

ちて失望落膽の極に沈んで居ますと、突然軽く綱を引くものがありました。次いで鋭い口笛が聞えましたから、思はず上を振り向きますと、人影が明に見えました。

私は夢かとばかり驚きました。欣びました。そして上をちつと見詰めた。すると、その人影は島の百姓であることが分かりました。私は直に呼ばんとして、その喉は乾き舌は硬張つて聲は殆ど出せぬでした。私は手に巻きつけた綱を解きました。すると百姓は崖の上に匍匐して、擦り切れ掛けた綱に手を掛けて、静にこれを引き揚げたまゝで、直ぐ見えなくなりました。是れは言ふまでもなく、新しい綱を岩に巻かん爲でありました。それから又崖邊に出て来て、岩角と綱との間に、自分のチヨッキを丸めて挟みました。そして數分の後百姓は私のゐる段まで下りて来て、綱を私の胸に巻き

附け、自分が再び上に登るまで動いてはならぬと警めて、直に猿の如くすらくと上に登つて行きました。それから間もなく劇しく綱を引きますから、登れとの相圖だらうと直ぐに綱に縋つて、殆ど夢中で登つてしまひました。百姓は私の四肢が凝つて硬張つてゐるのを見て、暫くの間之を揉んだりさすつたりして呉れて、それから附近からブリキの罐に水を一杯持つて来て呉れました。私は之を一呑に飲み干しました。

それから百姓は私に着物を着せ、靴下と靴を履かせてくれましたが、私は歩くことが出来ませぬでした。それで百姓は私を半ば背負つて、最短の路を取つて自分の村に連れて行つて、私に食事を薦めて、それから私を寢臺の上に寝かしました。私は直に熟睡して、そのまゝ何時間も寝つづけました。翌朝目が覺めて見ますと、大に元氣附いて居りましたから、

起き上つて始めて百姓と言葉を交はしました。

「百姓に聞きますと、羊の乳を搾つてゐる間に小羊が見えなくなつたら、それを捜しに所々方々を歩き廻る中に、不圖崖の上に人の上着やチヨツキがあつたから、變だと思つて近よつて見ると、綱が下つてゐて、その綱が切れ掛けてゐたので、愈變だと思つて、下を覗くと、そこに私の姿が見えたとの事でした。

そこで私は若し君の助けがなかつたなら、僕は今頃鱈の腹中にでもゐたのであらうと申して、強く握手しながら、百姓に感謝しました。

(一二三) 意氣地なしの弱追剝

巴里に近いメウドンの加部珍派の庵にゐた僧が或る日托鉢に出たの歸途

に捷徑せんと、寂しい森の中を通りますと、不幸追剝に出會ひました。

追剝は僧の咽喉に短銃を突き附けて「さあ、生命が欲しければ金を出せ。」

とお定まりの脅迫文句を並べましたから、僧は「自分は見らるる通りの乞食坊主で、全くの無一物であるから、彼は言はずに、此處を通して呉れ。」と、いろ／＼と頼んで見ましたが、追剝はいつかな許かず「吾々が一人の言ひわけを聞いてゐた日には商賣にならぬ。さあ愚圖々々言はずに持つて居るものを皆置いて行け。」と云ひますから、僧も詮方盡きて、貰ひ集めた食糧入りの頭陀袋と、やつと集めた三十六フラン(約十四圓)の金とを手渡しますと、追剝は仕合よしと、それを持つて、さつ／＼と行き掛けました。

此の時僧は「ちよつと／＼追剝さん。」と呼び止めますと、泥棒は「何の用だ。」と振り向きましました。しますと僧は「熟々考へて見ると、今此の儘、

庵に歸つて、物は皆取られたと言つて見た所で、住職が之を信じない所か、反つて拙者が密に之を隠したと疑ふに違ひない。それでは重ねの迷惑だから、拙者が君に最後まで抵抗した上で取られたといふ證據に、その短銃で、拙者の上着に、穴を開けて呉れまいか。さうだと、拙者も大に助るが。」と申しますと、追剝はお安い御用と、短銃を出して、僧の上着の裾に中てて、ドンと一發打ちました。

乃で僧はどんな穴が開いたかと、裾を見ますと、穴も何にも見えませんから、これはどうした理由かと尋ねますと、追剝は「此の短銃には實彈がこめてないのだ。本々威す爲のもので、生命を取る爲のものでないのだ。」と申しました。そこで僧は續いて「それは困る。外に實彈のこめてあるので打つて貰ひたい。」と申しますと、追剝は短銃は是れ切りで、二挺はも

つてゐない」と答へましたから、僧は俄にその態度を變へまして、「此の横着者め、飛道具がなければ、互に五分五分だ。さあ、どちらが勝つか、遣つて見よう。」と申しながら、小力のあつた儘、追剝に飛び掛つて、之を組み伏せ、ポカ／＼と、拳固を喰らはせながら、金と頭陀袋とを取り返へし意氣揚々として立去りました。

(一四) 蟹の喰ひ合ひ

今から約四十年前に没しました英國の動物學者のライマー・ジョーンズは、一度自分の水族室に、大小六匹の蟹を飼つて置きました。或る日の事その中の一匹が室の中央に這ひ出しますと、それより少し大きなのが直ぐ之を追ひ掛けまして、その缺で之を押さへて、御免とも何とも言はず、押

さへた友の甲を破り始めて、是れが成功するや否や中身を引き出して食べ始めました。

是れを見ました他の蟹は、浦山しくでもなりましたか、それとも仇討の爲でしたか、前のよりも大きいのが、一匹中央に進み出しまして、食事に無宙の友の甲を毀して、其の中の肉を食ひ始めました。

そこで此に一つの甚だ奇態なことは、前の蟹が後の蟹に、自分の肉を食はれながら、平氣で自分の食事を續けてゐたことです。是で以て見ますると、蟹は少しも苦痛を感じないものと見えます。それは兎も角、食ひつ食はれつすることは、天然界の一大法則ではありますまいか。

翌朝になりますと、此の食ひつ食はれつが進みまして、最大の蟹が二匹しか生存してゐませぬでした。而も二匹は各室の片隅に陣取りまして、互

に相手の隙を狙つてゐました。

(一五) 象狩に出掛けて象に狩らる

ロデシヤのムエロ湖に出掛ける

先年アフリカ洲ロデシヤ國の北東部に象狩に出掛けて、反つて象の爲に酷い目に遭された英人があります。其の話は本人の物語によりますと、次ぎの通であります。

アフリカの象も、近年象牙の價がよい爲に、甚しく濫獲された結果、今は餘程少なくなつて、アフリカもロデシヤ地方のやうな奥深い邊まで入り込まないと、思はしい獲物が無いと聞いて、種々な艱難をして、やつと同地のパンガエロ湖水まで辿り着いて、土人の話を聞き合せると、ムエロ湖

附近では、象が群をなして出て来て、作物を荒して困るとの事であつたら、それは幸ひと早速土地の者を案内にその方面に向けて出發したが、道と運搬の便とが悪いので、目的地に着いたのはそれから十二日の後であつた。

家がぞろ／＼出て来た

さて目的地では、土人村の附近に野營を張つて、之を根據とし、それから土人獵師に就いて象の在家を聞くと、此の地から約半里の所に象が多數出るとの事に、直にその獵師を案内にその場所に行つて見ると、生々しい而も素的に大きな足跡が多數あつたから、しめたと思つて附近の小高い所に登つて、木の中に隠れて様子を窺つてゐると、稍暫くしてザワ／＼する

音が聞えて来たから、靜に見て居ると、やつて来たやつて来た大象、小象、牡象、牝象とぞろ／＼とやつて来た。此の時既に日が暮れかゝつてゐたが、狙ひをつけるにはまだ充分であつたから、中の大ききさうな奴目掛けて、四五發續けざまにドン／＼と打つた。するとその音に驚いた彼等は天地も崩るるばかりの音をさして、逃げて行つた。此の時は前に言つた通り日暮であつたから、闇黒では何んにも出来ないと思つて、その儘野營地に取つて返した。

大象二頭を打つ

翌朝は午前四時過ぎには既に起きて、前夜雇つて置いた數名の土人を連れて、象を打つた場所に行つて見た。すると路傍に一頭の牝象が斃れてゐ

た。それから約二百間を離れて、又同じく牝象が一頭死んでゐた。一體牝は牡のやうに大きくないから、象牙もそんなに大きくない。それでその象牙の始末は土人に託して置いて、直様牝象を捜しに出掛けた。所が容易に見附らない。彼是する内に、その日も午後四時になつた。それでもう駄目かと思つて居ると、遙向ふの沼の側に二頭の大きな牡象がゐた。距離は約七八町もある。それで急いでその方へ向けて行くと、途中に少し横に離れて又二頭の牝象がゐた。しかし余は牡象が目的であつたから、牝象に見附からないやうにして、そつと進んで、終に牡象から七八間の所まで行つた。それでもうよからうと、先つ一頭に向けて一發打つて、その倒るるのを見て、又他の一頭に向けて打つた。

象に追はれて命からがら

此の時余が附近に突然雷のやうな唸り聲が聞えた。喫驚して振り返つて見ると、余の間近の森の中に隠れてゐた象の一群が銃聲に驚いて、吠えて逃げるのであつた。それと同時に余に取つて一大事が出来た。それは前の二頭の牝象が余を發見したことである。彼等は怒の眼を光らして、鼻を高く持ち揚げながら、余に向かつて突進して來た。南無三寶、象と余との間は僅に三十間ばかりしかなかつた。もう丸を籠める暇がない。丸を籠めた銃を持たせて置いた土人は、逸早く逃げて居ない。驅け出さうかと思つたが、象の足は意外に早いから、瞬く間に追ひつかれる。絶體絶命、仕方がないから、運を天に任せて、沼の中の蘆の茂みに飛び込んだ。所が十



む込げ道に中の泥でこぼれは道に象

間も行かない内に、泥濘に膝まで没して、進退の自由を失ってしまった。
それで止むを得ず、泥の中に寝て、手早く周囲の蘆を取つて、身體一面を
それで覆うた。

象に踏み付けらる

象は来た。それで息を殺して隠れてゐると、象は泥濘をぐつちやりく
歩行しながら、余を捜すやうであつたが、突然余の上に大石が落ちて来た
かと思ふと、余は象の足の傍にゐた。その足は大黒柱のやうに見えて、而
もそれが余の太股を踏んだ。それでその痛みは非常であつたが、聲を立て
ては大變と思つて、ちつと我慢をしてゐた。すると象は余が下にゐるのに
氣附かなかつたと見えて、その儘向ふの方へ行つて、余が取りおとした帽
子を見附けて、二頭でめちやくくに引裂いてしまつた。

象の鼻て宙天に揚げらる

余はほつと一息ついて、竊に天に謝した。そして身體は半ば泥中に埋つてゐたから、先づ頭を持ち上げて、それから立たうとすると、象に踏まれた股がキリリと痛かつた。それで小聲ではあつたが、思はず「あ痛た」と言つた。その聲が象に聞えたから耐らない。彼等は直に取つて返した。余は再び泥中に埋つて息を殺してゐた。しかし今度は彼等に見附つた。その一頭は忽ち鼻の先きを伸して、余が締めてゐた革の帯を取つて、宙天高く持ち上げた。此の時余はもう駄目だと思つた。しかし幸に帯が古かつた爲にプツリ切れた。それで余は再び泥の中に埋つた。すると象は執拗も、又鼻を伸して來た。その鼻を見た儘、余は現になつてしまつた。

幸に生命を拾ふ

不圖余は正氣附いて見ると、土人に取り巻かれて、木蔭に寝てゐた。余は土人に泥の中から引き揚げられて來たのであつた。その土人の話には、余は泥中に死んだやうになつてゐたから、象も死んだものと見て、その儘にして去つたものであらうと言つた。

余は太股に太した傷を受けてゐた。肉が潰れて眞赤に血ばんでゐた。しかし幸に骨は折れてゐなかつた。是れは下が軟い泥で、象に踏まれた儘、股が下にめり込んだからであらう。兎に角、予は歩くことが出来なかつた。それで持つてゐたハンモックに乗つて、土人に最近のヨーロッパ人の居たカタンガまで運んで貰つて、こゝで白耳義人の醫者（此の邊は白耳義の領地）に、手厚い療治を受けた。そして三週間の後に、始めてバンガエロの根據地まで還ることが出来た。

（二六）小姓の奇抜な悪戯

あつた
おもしろい

露帝ポール一世の小姓にカビヨフと申す巧慧しい少年がありました。或る時その同僚共と、帝の背中に垂れて居る辮髪を人の大勢居る中でグイト呼鈴の紐でも引くやうに、引くことが出来るかどうかと、争をしまして、自分は屹度引いて見せると申しましたから、それなら賭をしようといふことに決定しました。一體斯やうな争をしたといふのは、昔の露帝は生神様として人が非常に崇め奉つたもので、臣下たるものはその御所持品にさへ手を觸れることを嚴禁してあつたからです。

其の後帝は皇族一同を始め高官大勢を召して盛な御酒宴を張られたことがあります。その節酒宴の真最中カビヨフは帝の背後に廻はつて、辮髪を

掴んで、グイト強く引きました。しますと帝は「お痛——」とお叫びになつて、憤つて後方をお向きになりました。並み居る人々は皆恐縮して、震へ上りました。獨りカビヨフのみは平氣で靜に立つてゐました。

「何者ぢや、あのやうな事したのは。」と帝は眼を怒らして仰せられました。カビヨフ「はい、私でございました。陛下のお髪はいつでも振れて横向いてゐますから、只今それを眞直に直しました。」

帝「えー、此の悪戯猿め、引くならもう少し軽く引け。」
是れでその時の事は済みました。

帝はダイヤモンドを鑲めた恐しい立派な煙草函をお所持でありました。此の函は王冠同様極めて貴いものとして、之に手を觸れることを嚴禁してありました。カビヨフは又他の小姓等に此の煙草函から煙草を取り出して

見せると賭をしました。

或る日の朝早く、帝がまだ床の上に寝てお出の時に、カビヨフはバタ／＼と足音さして、帝の御寢所に入つて、御寢臺の傍の卓上にあつた前の煙草函を取るや否や、荒々しく之を開けて、中から煙草を摘み出しました。此の時既に目が醒めてお出になりました帝は、之を御覽じて「コラ、何をいたす、悪戯小僧」とお叱りになりました。しますとカビヨフは「陛下、煙草を一摘み頂戴しました。私が宿直に立ちましてから、もう八時間になります。睡くて堪りませぬ。それで煙草でも喫ぎましたら、睡氣がさめるかと思ひました。私は禮儀には缺けても、職務だけは、怠りたくありません。ぬ。」と申しました。

帝はお笑ひになりまして「ウム其方は旨いことを言ふ奴じや。よし、煙

草函は二人のにしては小さ過ぎるから、其方に取りらせる。持つて行け。」と仰せられました。

カビヨフは二度とも賭に勝ちました。

(二七) 水道の水と井戸の水

飲料水の種類

吾々の日常用ふる飲料水にも様々の種類があります。すなはち雨水・蒸溜水・山水・井戸の水・水道の水などでありませぬ。中で最も多く用ひられてゐるのは井戸の水と水道の水とでせうが、外に池の水もあります。

雨 水

雨水を飲料水にしてゐるのは、他に水の得やうのない所だけです。駿河の國の吉原町から一里ばかりも富士山の裾を登つた地方では、地面に岩が多く、井戸を掘つてもとんと水が出ませぬので、山から流れて来る水を使つてゐますが、この水は雨が永く降りませぬと、すぐに不足しますから、雨水を溜めて置いて、これを飲料水や雑用水に使つてゐます。樺太の海豹島でも、島には水が皆無なので、雨水や時には海上を流れて来る水を解かして取つた水を飲料水にしてゐます。

澎湖島の燈臺のある所でも、雨水を溜てこれを日常の用に供してゐます。雨水は降つた時には可なり清水ですが、溜て置くと微菌が湧いて悪水になります。

蒸 溜 水

蒸溜水は、海水でもその他の水でもこれを煮沸して湯氣となつて飛んで行く所を、更に釜の中で冷して、水にしたものです。この水は殆ど絶対に清浄ですから、雨水やその他の水を嫌ふ人々が飲むのですが、第一に金がかゝりますから、何人でも飲むわけには参りませぬ。第二に近來の説によりますと、水の質は良いとした所で、あまりよすぎて、永く之を用ふると、胃を害するとの事でありませぬ。

日本で支那から澎湖島を取つた頃には、この地の水があまり悪いので、同地の日本の役人は海水から取つて使つてゐました。又アラビヤのアデンの港は、水のない所ですから、土人は罕に降る雨を池に溜めて、使つてゐ

ますが、この地に行つて居る西洋人は、溜水はきたならしいとて、蒸溜水をこしらへて、これを日常使つてゐます。

山水と井戸水

山水とは谷川の水で、これは山の間の村や町で使つてゐます。山水は上手に人家や畑のない所から流れて来るのなら、大抵清水であること請合です。私は夏になりますと、年々山の中に出掛けますが、その時冷たい山水を飲むのは一等樂になります。

山水には非常に冷たいのがあります。先年私は信州上諏訪に参りました後方の山に登りましたが、人里遠い山の中の路傍に、非常に冷たい水が流れてゐたのには、實に驚きました。私はこれまで斯やうな冷水に出會つ

たことがありませぬ。この水はこの山に登る毎に必ず飲みましたが、これに手や足を入れて置きますと、忽ち冷て身體が寒くなるくらゐでした。

井戸の水は御存じの通り地の中に掘つた穴に溜つた水で、良いのもあれば又悪いのもあります。一體井戸の中には地面の水が浸み込み易いのですから、どうも水が悪くなり易いのです。そして溜つて動かない水には必ず微生物が沸きますから、どんどん汲む水は兎も角、あまり汲み方が多くない井戸の水は、目には如何に清らかに見えても、あまり感心いたしませぬ。

井戸の水の良否をきめるには、勿論能く検査した上でなければなりません。先づ土地によつて種々に違つて、地盤の硬い所の水は地盤の軟かい所の水より良く、深い井戸の水は浅い井戸の水より良く、盛んに汲む水は少しばかり汲む水より良いのです。

水道の水

井戸の水は如何に清らかに見えても、兎角細菌が多いものですから、近來川の水を沈澱したり、濾したりして、これを鐵管で諸所に引いて用ふることが流行りはじめました。これがすなはち水道で、昔も斯やうな水はありましたが、今に比べますと、水質が悪うございました。

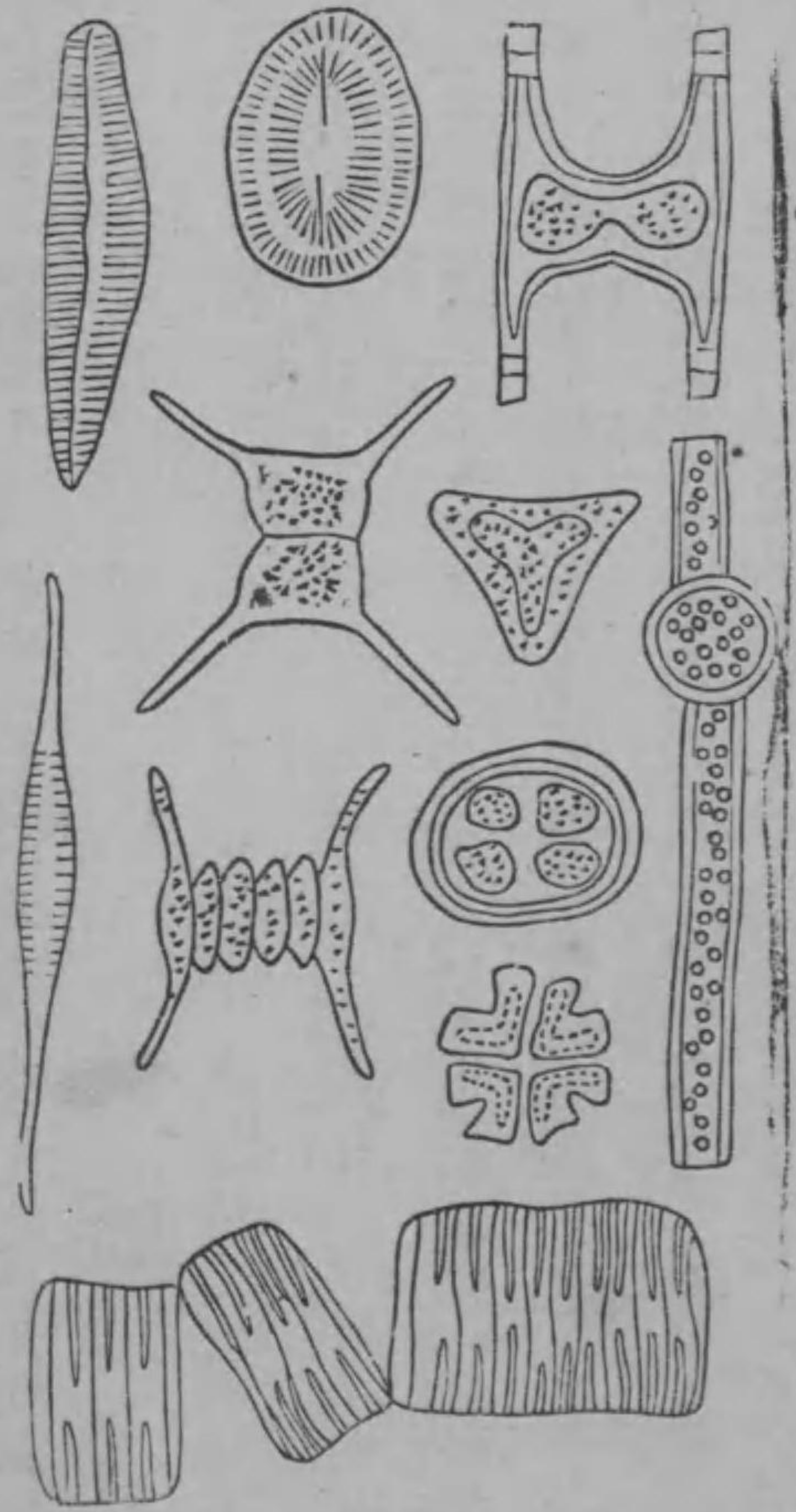
水道の水は河の上手のまだ水のあまりけがれない所の水で、更に沈澱したり、濾したものであるばかりか、始終動いてゐる水ですから、無論井戸の水より良いのです。

しかし河は外から塵埃や細菌なども這入り易いのですから、最近になつて百間も二百間も深い孔を掘つて、地の底のすつと深い所から、水を上に

噴き出させてこれを飲料にする所があります。この水は所謂掘抜井戸の水で、概して水道の水より清らかですが、何れの土地にでも噴き出させるといふわけには参りませぬ。

水は蒸溜水の外、どんな種類の水でも多少の細菌を含んでゐます。しか

第十圖 (東京の水道の水中に発見された無害の細菌)



るに是の微菌の多くは無害です。挿圖は東京の水道の水の中にゐる微菌の例で、服部博士の発見されたものです。

(二八) 賣藥萬歲論

多年ロンドンで開業をしてゐたフランスレブテンと申す和蘭陀の名醫が或る日グロスヴノルの廣小路を通りますと、四頭立ての立派な馬車の上で、華美に着飾つた従者数名に取り巻かれながら、大勢の通行人を集めて、盛んに藥を賣つてゐる男を見ました。

蘭醫は其の男の宿所を聞いて置いて、歸宅するや否や使を以つて翌朝自分の宅へ来て呉れるやうにと其の男に申入れました。男は約束の時刻に参りました。

それで蘭醫は男に向かつて「昨日私は足下が萬病の良藥といふのを夥しく賣つてお出になるのを見受けましたが、一體どんな藥であるか、私も好奇心に驅られて、それを見たいと思ひます。又足下は何處かでお見受け申した様ですが、鳥渡今思ひ出させぬ」と申しますと、男は「さうでせう。私は貴下が度々お訪ねになつたワラ夫人の僕をしてゐまして、三年前に、お暇を頂いて、只今の職業を始めました。」と答へました。

蘭醫「道理でお見受け申したやうに思ひました。しかしさうですと愈私に解らないのは、僅に三年ぐらゐで、どうして足下が只今のやうなお盛な商賣が出来るやうに、修業なされたかといふことです。御承知でもありませんが、私はもう四十年間も正直に醫者をしてゐて、而も、自惚れかも知れませんが、稍人にも知られてゐるやうです。そして尙辛うじて私の小さな

家政を維持して行くといふ次第です。」

男「貴下、私が貴下のお尋ねにお答えいたす前に、私に二三の質問をさせて下さい」

蘭醫「よろしうござる。」

男「貴下のお住居の町は、ロンドンでも、人通りの最も多い町の一ですが、貴下は一日中に通る人の数は幾人ぐらゐと思召すか。」

蘭醫「さあ、その計算は六かしい。しかしまあよい加減に見積つて、一萬もありませうかな。」

男「貴下の見積りは、先づ正しいものとしたして、その一萬の中で、物の道理が能く判つて、人の甘言に迷はされない人は幾人ありませうか。」

蘭醫「それは計算が尙六かしい。しかし、一萬中、足下のお言ひになるや

うな人は百人もあれば、多い方ではありませんまいか。」

男「さうですか。しますと、貴下は、御自分で、御自分の質問に答へてお出になります。その百人は貴下の方へ診察に参りまして、残りの九千九百人は、私の引受ます患者です。」

右の話によりますと、賣藥の跋扈することは、何れの國でも同じと見えます。

(二九) 談話上手の鷓鴣

ジョージ、キユビエーと申せば、學者間では、誰一人知らぬ者のない佛國の大動物學者でしたが、其の家に一羽の鷓鴣が飼つてありました。

此の鷓鴣は至つて伶俐で、其の主人のキユビエーを訪ねて來た諸方の學

者と、必ず言葉を変はしたといふ豪物であります。

鸚鵡は常に應接間に陣取つてゐまして、お客がその室に通りますと、直に左の足で其の大きな頭を搔いて「何の御用でお出になりましたか。」と申しました。而もそれが人の言ふのと寸分違ひませぬでした。それでお客も、主人を待つ間ではあるし、自然鸚鵡に返事をするといふ次第でした。そして鸚鵡は問答が済むと、「お饒舌りするな、」ジョージは忙しいから會へない。「出て行け。」「時間潰し。」などと、随分皮肉な言を申しました。

食事の時には、キュビエーは必ず自分の側に置いて、種々の美味いものを作りました。それで鸚鵡も、此の時には、野別にお世辭を振り蒔きました。食後キュビエーは葡萄酒を一杯遣ることにしてゐましたが、鸚鵡は喜んで一つの足で盃を掴んで、一滴も零さずにその咽の中に流し込みました。

そして興奮して來ると、高笑ひするやら、大聲揚げて饒舌るやら、果ては嘗て諸外國から來て、キュビエーと食卓を共にした諸學者の聲色まで遣ひ出すといふ騒でした。

斯やうな次第でしたから、キュビエーも大層興がつて、此の鸚鵡を大切にしておりました。しかし、お客の中には、随分此の鳥に遣り込められて、面喰つた者もありました。有名な獨逸の地學者のフンポールの如きもその一で、そのキュビエーの家を辭し去る時には、其の頤を襟の中に深く突き込んで、如何にも弱つたといふ顔付で、出て行つたと申します。

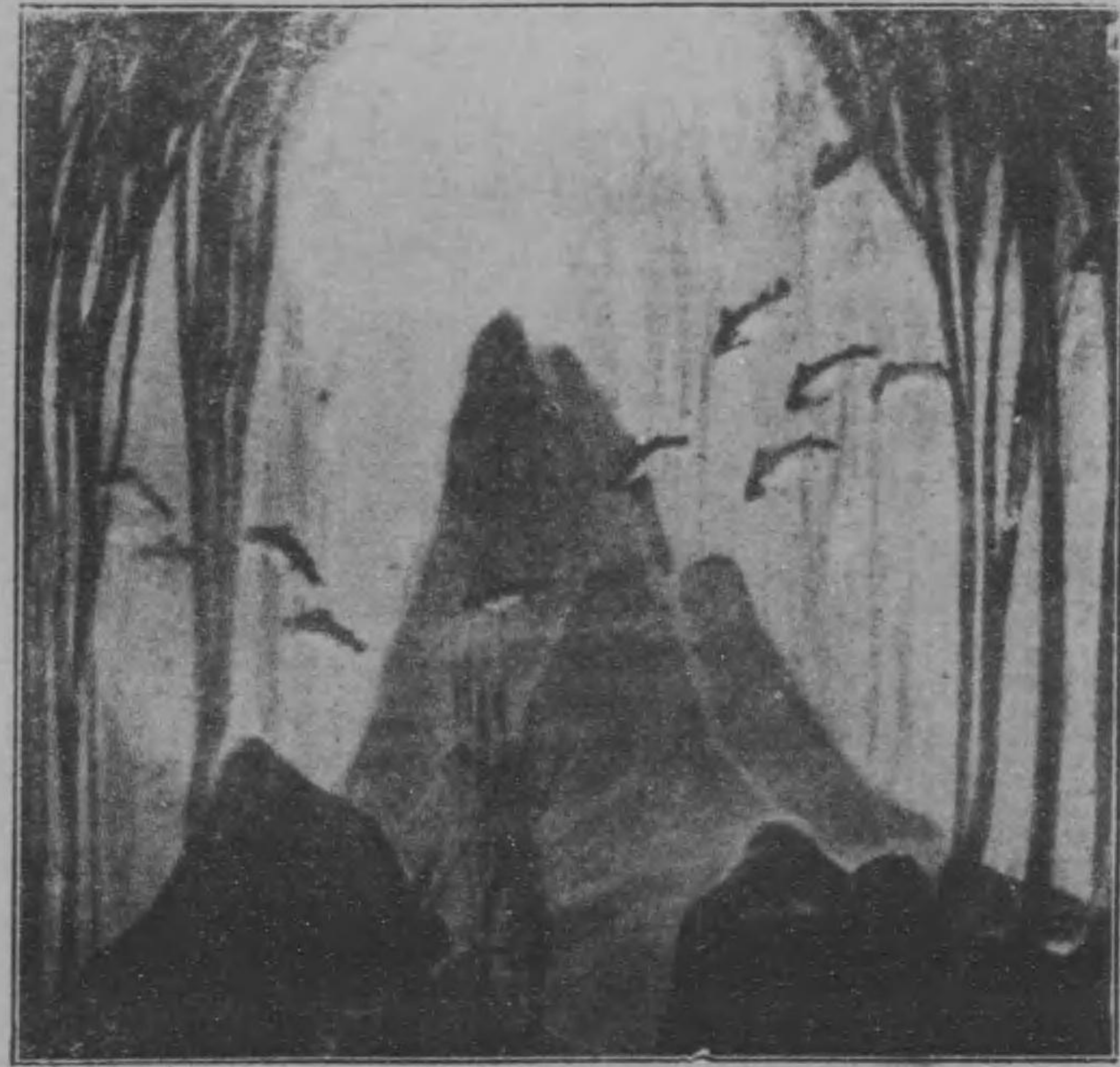
(二一〇) 海 底 の 森

海の底はどんな處か

海の底はどんな所でせうか。見たことのない方にはまるで見當がつきま
すまいが、矢張り陸と同じことで、平地もあれば山もあり、谷もあれば森
もあります。そして其處に住んでゐる動物は夥しい數で、其賑かな光景は
迎も陸の及ぶところではありません。
それから海の底には藻や草があつて、陸の上の山林と少しも違ひません。
これを海底の森と申します。昆布、鹿尾菜、若芽、石花菜などは皆海の草
であります。

陸の上と少しも變らぬ

ところでこの海草は何の爲に海底に生えてゐるのかと申しますと、それ
は矢張り陸上の草木と同じ様に、海中の魚や其他の動物の食物となるため



歩散の魚に底海の洋南

です。
海の中に動物の多
い事は、陸の上ばか
り見てゐる者の想像
も及ばぬ程です。そ
して互に食ひ合ひを
してゐるのがいくら
もあります。鮫鱈な
どがそれで、これは
無暗矢鱈に他の魚を
食べます。鯨なども

此類このるかです。

しかし此このやうに肉食にくじよくするものがある代り、一方ほうには海草類かいそうるかばかり食たべてゐるものもあります。即ち陸をかの上うへと同じことおなで、虎とら・獅子ししなど他たの動物どうぶつをたべる類るかがあるかと思おもへば牛うし・馬うま・羊ひつじなどのやうに草くさばかり食たべてゐるのがあります。

海草かいそうは魚うをの隠れ場所かくればしよ

ところが海うみは陸をかより動物どうぶつが多おほいものですから、その割わりに草くさや藻もも多おほくなければなりません。のみならず海草かいそうは魚うをの隠れ家かくれがにもなります。

ここに出でてゐる圖ずはブリッチャードといふ人ひとが海底かいていに潜もぐつて實際じつさいを描あいた海底かいていの眞景しんけいですが、その人ひとの話はなしによりますと、小魚こさかなは兎角とかく大魚おほさかなに附つけ狙ねら

圖 二 十 第



森の底海ドンラトツコス
景光の尺五十四下面水

はれるのですから、自然草しぜんくさの間あひだに隠かくれて大魚おほさかなに見附みつけられないやうにして

ゐるとしふことです。しかし附近よきんに大魚おほさかなが見みえないと、時ときには隠れ家かくれがから

出て来て、面白さうに遊び廻つてゐるさうです。それから草や藻は魚が卵子を産みつける場所に利用されます。丁度池の中の金魚が卵を金魚藻や其他の草に産みつけるのと同じことです。

寒い地方に魚が多い

次に魚といふものは熱い地方の海より寒い地方の海に多いものです。随つて日本邊では北海道、樺太、露領カムチャッカの邊が大漁場になつてゐます。たとへば此地方で漁れる鯡の量の如きは大したもの、これを石で量ると一年に十萬石から二十萬石といふ大漁があります。この他鱈・鮭・鱈なども大したものです。

かやうに同地方には魚が澤山ゐますから、従つて其隠れ家となり、産卵

圖 三 十 第



歩散の魚にて(洋南)森の底海

場となる藻や草も魚の數に應じて多くなければなりません。それです

から北海道地方には昆布が多いのです。

珍らしい
海底の草

又寒い地方の海に草の多いことは、西

洋人でこれを實見した者がいくらもありません。瑞典の植物學者のクエルマ

ンといふ人は、先年北極地方の海へ藻の採集に出かちてマクロシスチスといふ藻の生えてゐる光景を見て驚いたといふことです。

その驚いたわけは、この藻が海底にみつしり生えてゐる様は、開闢以來一度も人の入つたことのない熱帯地方の大森林のやうであつたからださうです。ところで此ネクロシスチスといふ草はどんな草かと申しますと、莖の長さが百尺もあつて、それに長さ百十尺の帯のやうな葉が四十八枚ついてゐる草であります。

なほ進化論で有名なダーウキンも南米のマゼラン海峡でマクロシスチスといふ葉の長さが千尺もある藻が、森の様に海底に生えてゐるのを見たといふことです。

(二二) 頑固な富豪

今から約百年の前のことですが、佛國の都巴里では、市區改正をして、街衢の體裁や、交通の便をよくすることになりました。此の時、リポリ町に、ノアイユ館と申して、大きな建物がありました。是れは新道路を設くる爲に、一定の年限の後、取り毀すことに極まりました。

然るに、此の建物は、エガトン卿と申す英國の大富豪の住居で、且卿は既に餘程の老年でしたから、立ち退きなどいふ面倒臭いことを大に嫌がりました。

それで一定の年限が来て愈取り毀しといふ段に至つて、市役所から卿にその旨を通じますと、卿は如何に市の爲とは云へ自分の意志に反して、家

を追ひ出される謂はれないと抗議しました。市役所でも、卿の有名な頑物であることと、金力と来ては大したものであることを思ひ合せて、立退請求の容易に行はれ難いことを見て取りましたが、さればとて、市區改正は公共事業の事、情實によつて、之を延ばすわけにも参りませぬから、市役所では愈立退を拒むに於ては強制執行をすとの書面を卿に差向けました。

しますと卿は豫てかゝりつけの醫師を呼んで、「自分は今後何年間生きさうか。」と尋ねますと、「五個年は大丈夫でせう。」と申しましたから、「それは全くの掛直やお世辭のない所ですか。」と問ひ反しますと、さうだとの答を得ましたから、醫師を返へして、今度は馴染の辯護士を呼んで、前の市役所から来た執行状を見せて、「斯やうな次第であるが、之に不服を唱へて裁判

沙汰にすると、その決定までには、勢一杯之を長引かして、凡そ幾年かゝるか。」と尋ねますと、五個年か或はそれ以上も長引かせることが出来ませうとの返答に、それならそれでよろしいと、辯護士を還へし、今度は以上二人に相談したことを市役所に通知して、もう少し取り毀しを猶豫するがよからうと申しました。

市役所でも止むを得ず、猶豫しました。しかし卿は五個年経たない内に死亡しました。それでノアイユ館も間もなく取り拂ひになりました。

〇 (二二二) 皇帝の慈愛心

昔オーストリア國の皇帝のジョセフ二世が、微行姿で、ウキヤナの市街を散歩してゐられますと、或る街で、年齢十五六歳の少女が、井戸から重

さうに水を汲んでおりました。皇帝はこれを御覧になるや、女の側に参られまして「お前は何の爲に水を汲んで、又名は何といふか。」とお尋ねになりました。

女は固より皇帝とは氣附かず、「私が水を汲みますのは、人の爲にしますので、その僅の賃錢で老母を養つてゐます。是れも本宮中の御者をしてゐました私の父が死亡りました時に、宮中から私共の扶助料が出なかつたからです」と申しました。

「しますると、皇帝は「それは氣の毒な事だ。よろしい、明日宮中に行くがよい。わしが先きに行つてゐて、手引をして、何とかして貰ふやうに骨折つて見よう。」と申されました。女は之に答へて「御深切は重々有りがたう存じます。兎に角参つて見ませうが、到底駄目でせう。何故なれば、皇

帝は、人に施しをなさるより、人から取り上げられる方がお上手ですからです。まあそれより、御深切があれば、此の水桶を頭の上に載せて下さい。」と申しました。皇帝はお安い御用と、女の申す通りにしておやりになりました。

翌日女は宮城に参りますと、先きに皇帝は門の附近に出てゐられました。此の時、女は初めて前日の人は皇帝であつたことに氣附きましたから、如何なるお叱りを受けるかと、ぶる／＼震へ出しました。

是れを見られた皇帝は「女よ、安心してゐるがよい。朕はそちに毎月六兩づゝの扶助料を遣はすから、母に孝養を盡してやれ。それから注意までに申し聞けるが、今後、朕を悪しざまに言ふことはよすがよい。朕は始終人民の幸福を祈つてゐて、これを苦しめようなどと思つたことは一度もな

い。」と申されました。
女は勿論有がた涙に暮れまして、いそ／＼して歸りました。

(二三三) 大學生ニウトンの失神

英國の有名な物理學者ニウトンが、或る日の朝、机に對つて一心不亂に學理の追窮に餘念のなかつた折、偶々下女が膳の上に一個の生卵子と、是を煮る小鍋とを載せて持つて來ました。是をニウトンの机の上の懷中時計の側に置きました。

平常ならば下女が其場で卵子を煮るのでしたが、ニウトンは人がゐては自分の研究に邪魔とでも思ひましたか、下女に卵子は自分で煮るからそこに置いて行けと申しました。それで下女は「卵子は三分間沸え湯へ入れて

置けば、いつものやうに煮えますよ。」と注意して出て行きました。

それから約半時間を経て、下女が再び膳を下げに來て見ますと、こはそも如何に、ニウトンはストープの側で懷中時計を鍋で煮ながら、片手に玉子を持つて之をじつと見詰めてゐました。

是れは、申すまでもなく、ニウトンが餘り深く學理を考へてゐました爲に、卵子と時計とを取り違へて、尙氣附かずにゐたのであります。是れは極めて有名な話であります。

(二四) 數百尺の塔から飛ぶ

露國のペートル大帝が丁抹王のフレデリック四世の招きに應じて、有名なコペンハーゲンの圓塔を見物に參りました時、王の案内で塔の頂上に登

りますと、遠近の光景が一瞬の中に集りましたから、帝は諸處を指して、豫ての政策を説明した後、急に思ひ附いたやうに、「貴殿は拙者の威光が如何に強大であるかを御覧になる氣はござらぬか。」と申しながら、王の返答をも待たずに、その引き連れたコザック兵の一人に、數百尺の下を指して一言「飛べ」と申しました。

しますとコザックは帝を見向きながら、手を舉げて敬禮して、少しも躊躇せずに飛び下りました。之を見た帝は自慢さうに丁抹王に向かつて「貴殿は何んと思はれる。貴殿に斯やうな家來がござるか。」と申しますと、王は「幸にもござらぬ。」と答へました。申す迄もなく王はコザックの猪武者に過ぎないことを諷したのであります。

あつた

(二二五) 蓄 財 宰 相

佛王 フランシス一世の宰相でしたデユブラ大僧正は出家の癖に金を溜めることが大好きで、終に其の額は大したものになりました。そして此の金は僧正の爲政治家としての手腕によつて溜つたものではなく、寧人民を苛斂誅求た結果といふのでしたから、驚くの外ありません。

王は豫々僧正にどうかして此の不義の財の一部なりとも吐き出させたいと思召してゐられました。或る時一策を案じられまして、僧正に「羅馬法王は突然遷化になられたとよ。」と申されました。

しますと僧正は折り返して「陛下、佛國の爲には新に法王の位に登る人は専念陛下の利益をのみ考へて居る者に若くはありませぬ。」と、暗に自分

を法王にして貰ひたいと云はぬばかりに申しました。それといふのも、當時法王は諸方の僧正中から選舉だからです。

王は之を聞かれました「お前の言は至極賛成であるが、それには、諸方の僧正等を説き附けるに、大した運動費が要る。所が、朕が内帑は今窮乏を告げてゐる。是れが残念である。」と申されますと、僧正は直に金銀に充たされた大箱二個を持つて來ました。王は之をお請取りになつて「是れ丈あれば大丈夫であらう。暫時預つて置く。」と申されました。

其の後、僧正は、法王が極めて健康でゐられると聞きまして、王に前の金の返還を申し出ました。しますと王は「法王に就いて誤報をした外國派遣の大使には、それ〴〵譴責を加へるであらうが、金は朕に預けて置くがよい。法王も、今こそ御健全であるが、早晚遷化れるに違ひないから。」と

お答になりました。

(二二六) 紺色の薔薇の花

紅黄 紫色とりどりの草木の花

花の色には、同じ草木のにでも、いろいろに變つたのがあります。御承知の通り、白い椿の花もあれば、紅い椿の花もあります。又紅白咲き分けのものもあります。又梅や桃の花にも、白いの、薄赤いの、紅いの、紅白咲き分けなどがあります。尙又朝顔の花に白、紺、紺白の絞り、赤、薄赤、紫瑠璃、紅白の絞り等、種々様々の美しい色のあることは、殆ど知らぬ人はありません。

ハコネツツギと申す木の花は、咲いた時には白いのですが、日が経つに

連れて赤くなりません。斯やうに、同じ種類の花にいろいろの色のあることや、又同じ花が時が経つにつれて、変色することは、これは取りも直さず花の色は培養一つで、自由に之を變へさせることのできる證據と申してよろしいのです。

十五萬圓の金を捨てて研究す

今から二十年前に、ヨーロッパに、紺色の薔薇を咲かせたいと、様々に苦心して、とうとう成功せずに、八十歳の高齢で歿なつた人があります。此の人は獨逸生れで、その苦心の年数は四十ヶ年、しかもこれに費した金が十五萬圓といふ大金でした。此の人は朝から晩まで折々は食事をも忘れて、花の変色にのみ心を凝らしてゐました。それで人が皆薔薇氣狂と申し

ましたが、平氣の平左衛門で研究してゐました。

さてかほどの熱心家が何ゆゑに成功しなかつたのでせうか。これには天も少し無情過ぎたやうに思はれますが、翻つて能く考へて見ますと、成功しなかつた相當の理窟もあるやうに思はれます。

昔フランスの國に、ドカンドールと申す名高い植物學者がゐました。此の人は世界全體から見ても、指折つて算へる程の大家でありましたが、花の色を研究しまして、次の様なことを申しました。

「花の色には、原色とも申すべきものは二つしかない。一つは黄色で、一つは紺色である。そこで黄色を赤色にしたり、紺色を赤色にしたりすることは、さして六かしいことではないが、黄を紺にしたり、紺を黄にしたりすることは絶対に出来ない。此の二色は全く反對の色で、謂ば敵同志のや

うなものである。」

右はドカンドールも餘程研究の上で申した事ですから、真逆嘘とも思はれませぬ。しますと前の獨逸人の遣り方は少々間違つてゐたかと思はれます。なぜなれば薔薇の花には白・赤・桃色等の外に黄もありません。此の黄色の花のあるのは、ドカンドールの言によりますと、紺色にはならない理です。それでもし彼の獨逸人が少しでも此のドカンドールの言つたことを聞きかじつてゐましたならば、四十年の年月と、十五萬圓の大金とを費さず済んだかも知れません。

紺色もあり黄色もあれば大発見

なるほどドカンドールの言つたことの眞實らしいのは、ちよつと考へま

した處、同じ花で黄色と紺色とのあるのはないやうです。朝顔の花には種々様々な色がありますが、紺のはあつても、黄色のはありません。躑躅の花も白、赤、薄紅、洋紅、紫、樺、黄とありますが、紺色だけはありませ

ん。
三色堇の色が白、黄、紫で、此の紫が濃いので、餘程紺色がかつてはありますが、眞の紺ではないやうです。皆さん、少し考へて御覽になつてはいかがです。もし同じ花で、純粹の紺色もあり、又黄色もあるのがありますなら、それは大した發明で、ドカンドールの言つたことをその根柢から覆へすことになりますから、非常に愉快だと思ひます。

(二七) 吾輩は支那の大皇帝

今から百餘年の昔ナポレオンが白耳義ワータローの大決戦で、一敗血に塗れて、佛國に逃げ歸るや、當時の對佛國聯合軍はひた押しに押し行つて、間もなく佛都巴里を陥れました。此の時聯合國の主なる元首も軍隊に引き續いて入都しまして、佛國との商議に與りましたが、何を申しても、巴里はさすがに歐羅巴でも花の都、元首方でも物珍らしく感じられました。それで或る日の事露國のアレキサンドル帝と普魯西のウヰリヤム王と埃地利のフランシス帝との三方が微行姿で供をも連れず、市街見物に出掛けられました。しますと或る街で一名の見知らぬ人が三方に一禮しまして、「皆様は旅のお方と見受けませんが、もし御見物なら私が御案内致しませう

かしと申しました。

三方はその好意を謝しまして、自分等はお察しの通り他國の者。且土地不案内であるから、さう願はるれば此の上もない幸福だと挨拶されました。是に於て彼の人三方を主なる名所舊跡に案内して、一々精しく説明しましたから、三方は大層な御満足で、別れに臨んでは深くその厚情を謝されました。

しますと彼の方は「今日は各位のお供をいたしまして、洵に愉快で堪りませぬ。此の上は、各位の御姓名をお漏らし下さるやうに願ひます。」と申しました。

三方は、是には窮されました。微行ですから、御自分方の素性を明すわけには行かず、さりとて深切を盡くした人に嘘も吐かれずと、策極まつた

所で、お一方が、遠廻しに、「私はね——、私は、人が、露國の帝と稱へてゐます。」と申されますと、他の二方も續いて「私は人が普魯西の王と申してゐます。」「私は人が埃地利の帝と名附けてゐます。」と申されました。しますと彼の人は眼を圓くしまして、「此の人達は飛んでもない人だ。チヤキ／＼の巴里つ子を愚弄するにも程がある。人が君等にさういふ名を附けて居るなら、吾輩へは、人が支那の大皇帝といふ尊號を奉つて居るのだ。」と申しながら、ブン／＼憤つて行つてしまひました。

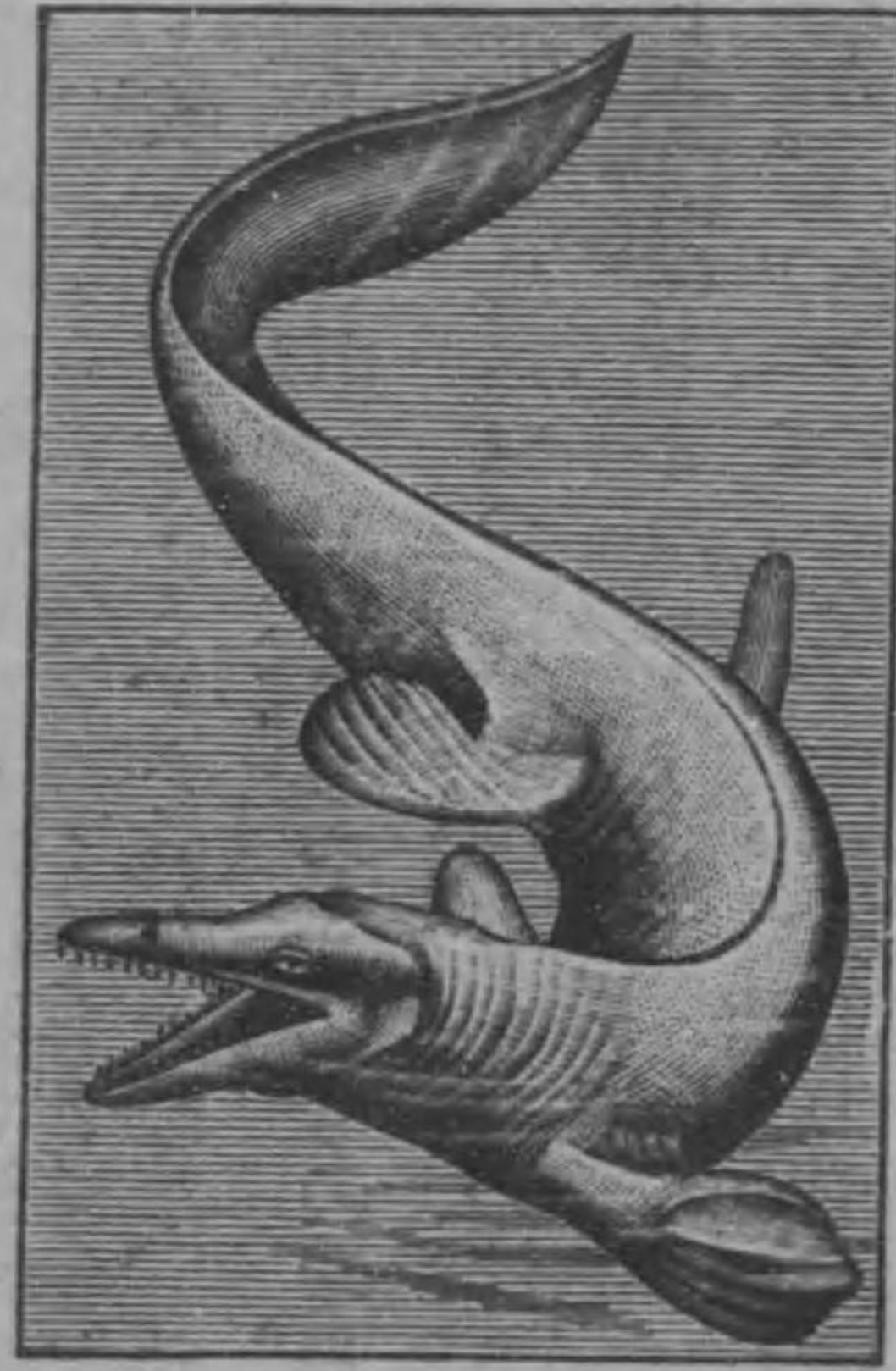
(二二八) 前世界の海を荒した動物

今日海の底となつてゐる所を陸の上と比べますと、海の底の方が餘程廣うございます。地理學者は二倍半よりもつと廣いと申します。又海の底の

深い所は、陸の上の高い所より、その長が伸びてゐます。すなはち陸の一等高い點はヒマラヤ山のエベレストの峯で、海面から二萬九千七百七十尺ざつと二里九町ありますが、海の底の最も深い所はヒリツピン島の東にありまして、海面から三萬二千三百尺の下で、ちよつと二里半になります。尤もこれは今日知れてゐる所だけの話で、今後もつと深い所が発見されなことも限りませぬ。陸の方では前のエベレストの峯より高い山は世界中どこを捜しても見當りませぬ。

かやうに海の方は廣くもあり又深くもありますから、しぜんその中には陸の上よりより多くの動物が棲んでゐます。その多い動物の中には、随分大きなもの、妙なもの、變なものなどがゐまして、それが互に喰ひ合ひ咬み合ひをしてゐますから、海中は先づ化物屋敷と見て差支ありません。

圖 五 十 第



スチスダリク(龍滄)

と自慢してゐるだけ、如何なる大動物猛獸類でも、これを退治することができます。もちろん腕力では敵ひませぬから、智慧と飛道具とで退治しま

陸では人間は萬物の靈長などとんと意氣地がないからです。すゝと、人間は海にはいつては、

検することが出来ませぬ。

何故人間には海の中の探検

が充分にできないかと申しま

すゝと、人間は海にはいつては、

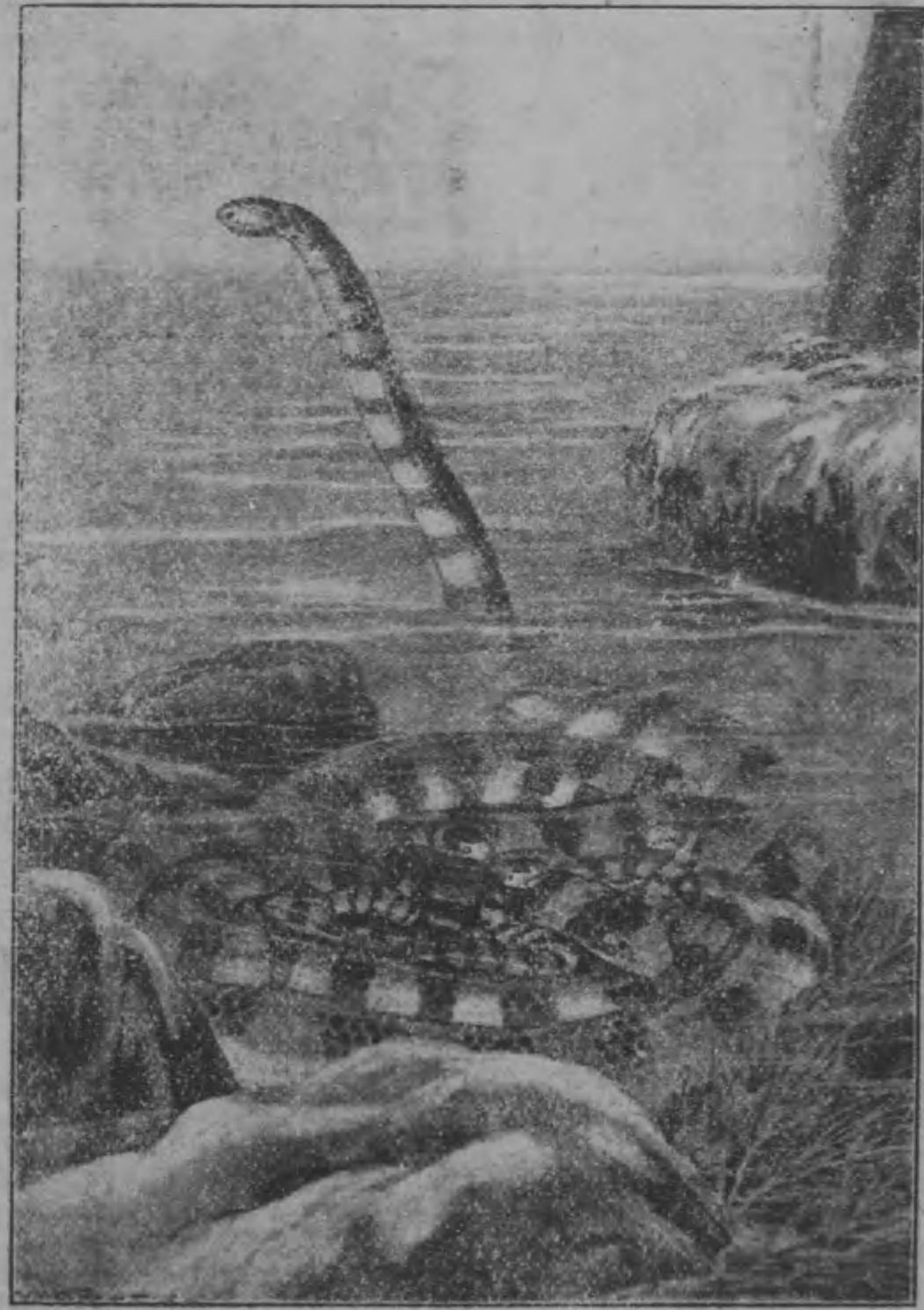
とんと意氣地がないからです。

陸では人間は萬物の靈長など

これを退治することが

智慧と飛道具とで退治しま

圖 四 十 第



蛇 海 の 日 今

す。ところが海の中となりますと、人間は三文の價値もありませぬ。少しばかり泳ぐことは知つてゐますが、泳ぐだけで化物に敵對することは殆ど出来ませぬ。泳いでゐる時に鱈か鯨が來て、手なり足なり又頭なりにがぶりと咬みつきますと、それでお終ひ、全く手の出しやうがありません。尤も潜水器と申して甲冑のやうなものを着て、海底で仕事をする事もありますが、これはたつた二町半ぐらゐの深さまで、それより深い所には潜ることも出来ませぬ。

今日の海や陸は今日だけのもので、將來には今の陸が海になつたり今の海が陸になつたりすることは、鏡に掛けて見るやうに明かです。といふのは大昔の前世界といふ時代の海は今のと大分違つてゐましたからです。學者の説では、世の中には永久變らないものはないと申しますが、海も矢張

さうで、淺くなることもあれば、深くなることもあり、又全くの陸になることもあります。昔から「昨日の淵は今日の瀬」と申すこともあり、「滄海變じて桑田となる」と申すこともあります。これは昨日まで深い所であつた川が、今日は淺い瀬になり、これまで青い大海であつたところが、陸に

圖六十第



龍 腕 扁 變つて桑畑となつて居るといふことで、

これらはつまり世の中の物の變り易いことを説いたものです。かやうな次第ですから、昔の海は今のと大分違つてゐました。又海が違つてゐればかりでなく、その中にすんでゐた動物も大層違つてゐました。前世界の海の動物はその數が澤山ありますが、怪物とも申すやうなもの

は海蟒・海龍・齒鯨の類でありませう。

海蟒は今の海蛇と同じやうでやはり爬虫ですが、これには却々大きなのがありました。中で最も世間に知れ渡つてゐますのは滄龍と申す種類です。

此の物は學名をモザサウルスと申して、その始めて發見せられたのはオランダ國です。此の國のマストリヒトと申す市街の附近の地の底に、千年餘の昔から、石を切り出す所があります。此の石切場で、今から百四十年前に、大きな動物の骨が石の面に附着て出ました。その後同じやうなものが英國・佛國・露國等に出ましたが、今はアメリカ合衆國のカンサス州に一等立派な完全なのが出ます。

滄龍は大小種々あります。第十五圖は滄龍の一種でクリダスチスと申すアメリカ産です。第十六圖もやはりアメリカの産で名を扁腕龍と申します。

身の長は二十尺あります。此の類でチロサウルス、アイジャロサウルスな

圖 十 一



鯨の界世前の尺十七七を長

どと申すものもありました、皆恐ろしい怪物共です。

海龍も同じやうな海の怪物ですが、身體がさほど長くありません。しかし却々大きく、身長

が三十尺もあるのがあります。鯨のやうに魚の形をしてゐるものもあれば、麒麟のやうに長い頸を有つて稍蛇に似たものもあります。

前世にはなほズーグロトンと申す素晴らしい大きな身長が七十尺もある鯨がゐました。その形は第十七圖の通りです。尙是より少し小さくてスクアロドンと申した鯨もあります。此の二種の鯨は大きな鋭い齒を有つてゐましたから、これを齒鯨と申します。

前世に鯨もゐました。それは今日のより十倍も大きかつたと申します。

（二一九） ナポレオンの武士道

ナポレオン一世が盛にヨーロッパ諸國を相手に戦争をしてゐました頃は、英國人の俘虜が今の名高いウエルダン要塞のある所に多數收容してあ

りました。その中の水夫二名が或る時そつと收容所を抜け出しまして、人目を避くる爲に野に寝たり山に隠れたりして、到頭百里餘の道程のブローイニユと申して英國を向側に見るイギリス水道の海岸まで辿り着きました。此の處から英國までは僅に二十里ではありますが、波の上のこと、どうしても舟に乗らなければ行かれませぬ。しかし土地の人の警戒が嚴重なので、舟でも雇つて乗らうものなら早速發見されますから、一大決心をして自身に舟を造ることにいたしました。

併し材木は勿論なし、道具とても自分等の持つてゐた小刀の外何にもありません。りませぬから、人乗せる程の舟が出来ようはずがありませんが、人の一心といふものは偉いもので、二人は濱邊に落ちてゐた小さな木片を拾ひ集めまして、終に一つの舟を拵へ上げました。尤も舟と申しても縦横僅に三

四尺、二人がやつと身體を容れるだけのものでありました。しかし二人も此の貧弱な函舟で二十里の海上を乗り切れないことは百も承知でありましたから、何か良い機會がありさうなものと待つてゐますと、或る日沖の方に一隻の英國の帆前船が見えました。それで二人は小躍りして喜びまして、この船まで漕ぎ附けさへすれば、自國船の事急度救つて呉れるに違ひないと、さつと濱邊を乗り出しまして、一所懸命に漕ぎましたが、まだ五六町も行かない前に海岸に見張をしてゐた税關吏に見附かりました、だから耐りませぬ。早速早船で追ひ掛けられて、有無を云はせず、濱邊に引き戻されました。

しまずと此の事が忽ちブローイニユの住民に知れましたから、物見高い世の中のこととて濱邊には見物人が黒山のやうにたかりまして、英人の木

葉舟を見て、その大膽さに驚かぬ者はありませぬでした。

聽て此の事がナポレオンの耳に入りますと、ナポレオンも好奇心にかられて、英人を見たいと申しましたから、二人と舟とはナポレオンの前に引き出されました。

ナポレオンも、舟を見ては驚きました。その舟は中に帆布を敷いて、水の漏らないやうにはしてありましたが、それでも一人で容易く持ち上げられる軽い小さなものでしたから、誰が見てもそれで波の上に乗れさうにはありませぬでした。それでナポレオンは二人に向かつて、

「汝等は、此の貧弱な木葉箱で、故國に逃げようとしたといふが、それは真か。」

と申しますと、英人は

「それに相違ございませぬ。若しお疑ひなら、吾々を放免てやつて御覽なさい。吾々は急度これで海上を乗り切つて御覽に入れます。」と答へました。

それでナポレオンは其の膽力に感心しまして、「フム、汝等は天晴な者共ぢや。汝等は全身膽と魂ぢや。予は敵味方に拘らず、勇者が大好きぢや。予は無論汝等を放免てやる。しかし汝等が命を的に此の函で危険を侵すのを見るに忍びない。今に、汝等は、英國船で故國に送り届けて遣はす。それでロンドンに歸り着いたらば、皆の者に、ナポレオンは、よしんば敵方でも、汝等のやうな豪膽の勇者が大好きだと云へ。」と申しました。やがて二人の水夫はロンドンに着きました。しますとロンドンの市民も、流石はナポレオンよと、大にその大器量を褒めました。

(三〇) 日本の子供

日本では三月の雛祭や五月の幟祝のやうな子供のための特別なお祝をいたします。ところが外國にはこんなお祝はありません。それですから外國の人は日本は子供の極樂のやうなものだと申して居ります。

そこでかうした國に住んでゐる日本の子供を外國の人はどんなふうにかへてゐるか、一つ二つ西洋の本の中に書いてある文句を、皆さまにお眼にかけませう。

ある本の中には次のやうに書いてあります。

「日本人は大そう子供をかはいがる人種で、子供を育てるのも、西洋にくらべると、よつほど自由のやうである。けれども日本の子供は決して我ま

まではない、それどころか賢くて我まゝを抑へる心が大へん強い。これは先祖から傳つて來た性質のやうである。

それからまた日本の子供は小さい時から大人に對して殊の外丁寧である。そして大人もまた子供に對しては情ふかくて、遊びの邪魔をしないやうに注意してゐる。そんなふうだから、日本では子供をいぢめる人は殆んどない。たとひ少しはゐるとしても、他人の前では決していぢめない。もしそんなことをすると、日本では皆から指弾きをされる。

日本の子供は遊んでゐる時でも禮儀が正しい。そしてお互に親切である。道で子供たちが出遇ふ時などは、いくら仲の好い間柄でも、ちやんとお辭儀をする。またその言葉づかひも極めていいねいである。」

これを讀んで皆さんはどう思ひますか。なかなか賞めてあると思ひませ

んか。

それから次のは日本を旅行したある英國人が書いたものです。

「私は日本の子供が大好きである。何しろ日本の子供は親の言ふことをきかなかつたり、親に手向つたりするやうなことは決してない。私はそんなことを一度も見たことはなかつた。それといふのも日本人は數百年以來、眼上の人に從ふといふ立派な性質を作り上げたからである。

私は日本の子供が互に喧嘩をしてゐるのを見ることがない。もし喧嘩が起りさうな時には、一ばん年上の子供がその間に入つて、どちらが悪いか裁判をする。

また子供が遊んでゐるところを大人が通ると、どんなに遊びに夢中になつてゐても、きつと子供はわきの方へ寄つて大人を通すのである。私は日

本に滞在してゐた頃、必ず少しばかりの菓子を持つて外へ出ることにしてゐた。そして道傍で遊んでゐる子供に分けてやつた。けれどもこれを貰つた子供は一たん親に見せてからでないかと決して食べなかつた。また私に向つても非常に有難く思つてくれて、きつとお辭儀をした。これなどは西洋ではまつたく見られないことである。

また子供に菓子を與へても、自分ひとりて食べずに、必ずそこにゐる友達に分けてやる。こんなかはいらしい子供は、日本のほか西洋のどの國においても見ることは出来ない。」

どうです、少しほめ過ぎてあるとは思ひませんか。けれどもかう書かれてゐるのですから、ならうことなら、かうした文句にも負けないくらゐに、立派な人になつて下さい。

いつたい子供は未來の花とも申すべきもので、未來の大臣、大發明家、大學者、大英雄などがきつと現在の子供の中から出るわけです。そしてこれらの豪い人々が現はれるのも現はれないのも、皆さんの決心ひとつにあらのです。どうぞ此のことを常に忘れず、ぜひしつかりつとめて下さい。

〇 傳へるべきこと (三二一) 雄辯家の機轉

稀有の雄辯家として、世界にその名を轟かした希臘のデモスセニースが或る時大勢の希臘人を集めて、或る重要問題に就いて懸河の辯を奮つてゐますと、聴衆中諸所に談話聲が聞えて、頗る喧騒を極めましたから、辯士は機轉をきかして、一聲高く「爰に面白い話があります。諸君の謹聽を煩します。」と申しますと、聴衆は忽ち鎮まりましたから、辯士は續いて「盛

夏の候に一青年が一頭の驢馬を借りて、アセンスからメガラに向けて行きました。正午頃になりますと、暑熱が餘り酷いので、青年も馬子も驢馬の影へ這入らうとしました。所がその影が餘り少ないので、兩人の間に激烈な争論が起りました。馬子は驢馬は貸しても影は貸さないと主張し、青年は驢馬を借りたる以上影も使用する権利があると主張しました。争論は將に破裂せんとしました。」と申して、その儘さつさと演壇を降りましたから、聴衆は是非今の話を續けて欲しいと請求しました。

しますとデモスセニースは再び演壇に登りましたから、聴衆は前の話を續けると思ひの外、諸君は驢馬の影のやうな下らない話をすれば静粛で、重要な話をすれば、直に馬鹿話を始める。何たる事ぞ。」と申しましたから、聴衆もその非を悟りまして、その後は辯士の演説をその終りまで謹聴しました。

した。

(三二二) 裝飾になる美しい鳥の羽

動物にも綺麗なものはいくらもありますが、一等綺麗なものは鳥でせう。鳥の羽には赤・青・緑・紫と種々の色が美しい文彩をしてゐますから、鳥その物もまことにかはいらしく見えます。

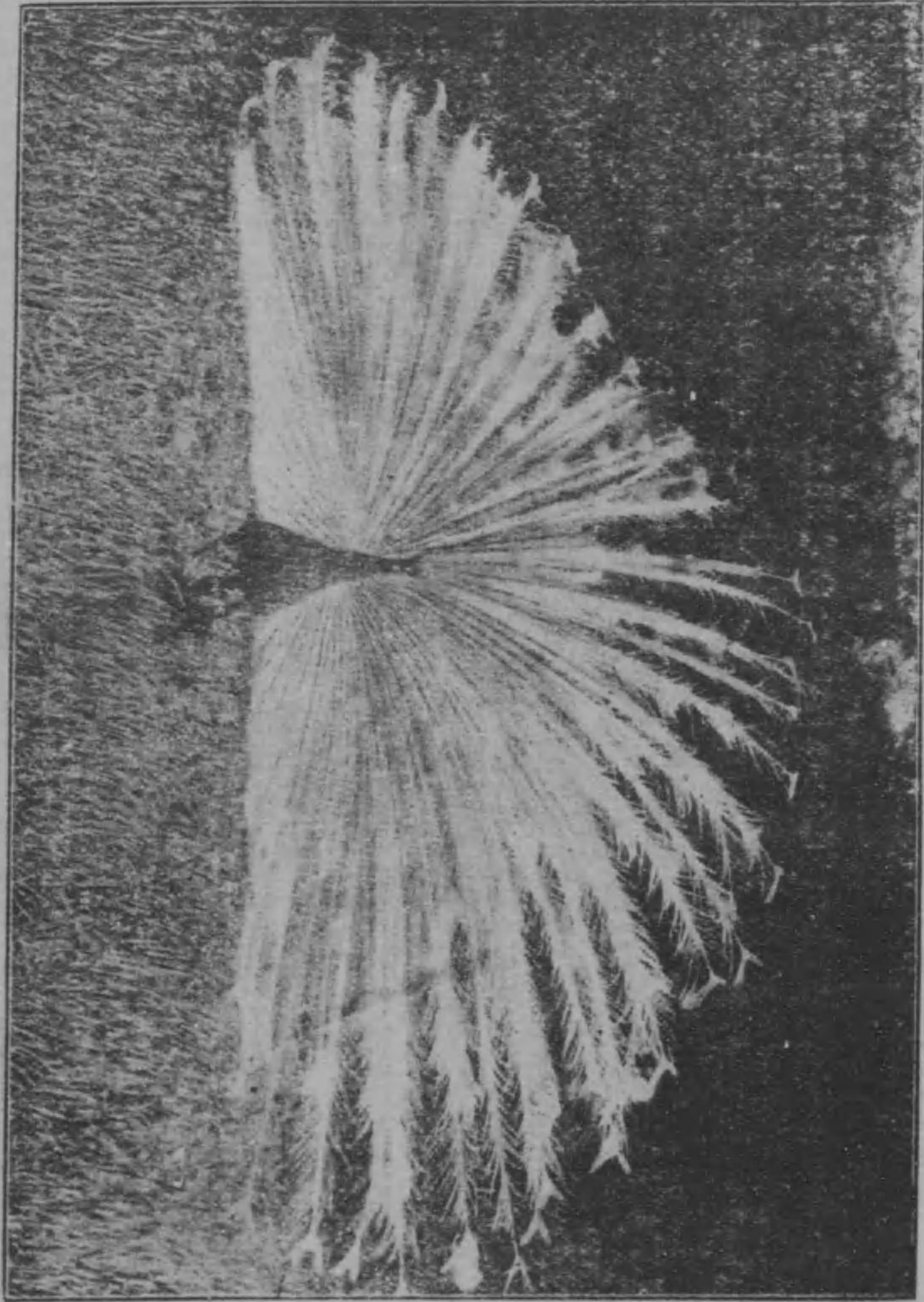
鳥は綺麗な動物であるばかりか、多くは人間に對して益をしてゐます。小鳥は芋蟲やその他作物に害になる蟲を食べてゐます。それで遠廻しに人間に益をしてゐるわけです。燕はその好い例です。此の鳥は田畑の上を飛んで、作物の害虫をさがして、それを自分でも食べ、又巢に待つてゐるその子にもやります。それでこの鳥は人間が十分に保護してやらなければな

りませぬ。

雀は實の入らうとする稻を荒しますから、悪戯をするに違ひありませんが、又害虫をも取つて食べてゐますから、さほど悪むべきものではありません。

さて前に申した通り鳥の羽はまことに美しいのですから、昔から裝飾に使はれてゐます。軍人の正帽につけてある白い羽や文官の大禮服の帽子についてある白黒の羽はごぞんじであります。これは駝鳥と申して我が國にはゐない大きな鳥の尾の羽です。

裝飾として用ゐられる羽の中には駝鳥のが一等綺麗です。それで西洋では婦人用の帽子のかざりにも盛に用ゐられてゐます。駝鳥に次いで多く用ゐられるのは孔雀の羽です。此のかざりにする孔雀



第十八圖 孔雀の羽をひらげたところ

の羽も尾の羽ですが、孔雀が尾を擴げた所(第十八圖)はすばらしい立派なものです。孔雀が鳥の王といはれるのも無理はありません。右の外まだ種々様々の鳥の羽がかざりになります。中で珍らしいのは南洋産の極樂鳥や天琴鳥の羽でせう。

羽を飾にするのは、文明の人より野蠻人の方に多いのです。野蠻人はこれを帽子などに作るばかりか身體にもつけます。これはさもあるべきことで、文明の人は手細工が巧ですから、飾にはその細工品を用ゐますが、野蠻人は細工が拙いですから、自然天然物に手出しをするやうになります。その天然物には石や介などもありますが、一等綺麗なのはやはり鳥の羽です。すから、どうしてもこれを多く用ゐることになります。

第十九圖は大そう深い大帽子ですが、これはアフリカ南方の土人が鸚鵡

圖 九 十 第



子 帽 大 の 羽 の 鳥

の尾の羽で作つた赤帽子で、儀式の時にかぶるものださうです。

に緋絨の鎧でも着たやうなものでせうか。

第二十圖は同じく南アフリカのズールー人で、全身を駝鳥やその他の鳥の羽で飾つたところ。これは出陣前の姿と申しますから、我が國の古武士の出陣前

野蠻人は男子の方が女子よりも多く身體を飾り立てます。そしてその飾り方も、文明の人よりよほどくだいのです。

文明の人が裝飾に鳥の羽を用ゐる始めたのは何時頃からかよくわかりませぬが、駝鳥がもとアラビヤの産である所から考へますと、此の地方の文明人であつたペルシヤ人・メソポタミヤ人・シリヤ人などは、今から四千年餘も前にこれを用ゐたのではないかと思はれます。

ヨーロッパの人が初めて駝鳥の羽を見たのは、十字軍と申してヨーロッパ人がトルコ人の征伐にシリヤに出かけた時であつたと申しますから、それがほんたうなら、今から七八百年の前のことでもあります。

當時此の駝鳥の羽がヨーロッパで飾に用ゐられたかどうかはよく判りませぬが、その頃の交通の不便は大したものでしたから、用ゐられたとして

圖 十 二 第



人 - ル - ズ

も、高貴の人や、富豪などの間にのみ用ゐられたことと思はれます。

それな

らその多

く用ゐら

れ始めた

のは何時

からかと

申します

と、まあ

ざつと百

年前からでせう。しかし、非常に流行るやうになつて来たのは二三十年以

第 二 十 一 圖



鳥 駝

来です。そしてその爲に今では鳥その物が盡きはしないかとの心配まで出てきました。

實際今日では鳥は次第に減つて行きます。一はこれを食料にするからでもありませんが、主な原因は羽を取る爲に殺すからです。かやうな次第ですから、西洋では鳥の保護といふことをやかましく申すやうになり、又鳥の羽を飾に使はぬといふ會まで出来てゐます。

駝鳥の羽は幸にまだ不足しませぬ。これは英國の人が數十年前、南アフリカに大仕掛でこの鳥を飼つて殖やしてゐるからです。それで昔は駝鳥といへば、多くはアラビヤから出たものですが、今では南アフリカからも盛に出てるのです。

今日の吾が國の軍帽や大禮服の帽子のかざりとする駝鳥の羽も、やはり

南アフリカから取り寄せたものです。

あ (三三三) 王の顔面に青痰を吐く

イタリヤ國マルタ島生れのアンドレヤ・デ・ポノといふ阿弗利加旅行者は
ナイル河の上流地に入り込んで、盛に人買商賣をした人ですが、或る時土
地の名産である象牙の取引を許して貰はうと思ひまして、其地の王と會見
する約束をいたしました。

阿弗利加土人の王は王と申しましたが、勿論蠻人の酋長に過ぎませぬか
ら、文明國の王とは雲泥の相違で、一見した所では普通の土人と大した區
別もつきませぬ。

會見の場所は、川岸でしたから、ポノは小舟で参りまして、岸に上りま

すと、そこに王宮(實は小屋)がありまして、その入口に半ば裸體の王が玉
座(實は疎末な腰掛)に坐つてゐまして、其の前の地面には、敷物の積りか
四人の家來が平に匍匐になつて駢んでゐました。

ポノは王から二間ばかりも手前まで進みまして一禮をしますと、王は座
から立つて、家來の背中の上を進みまして、ポノと握手して、自分の踏ん
て居た家來にブツ／＼と唾液を吐き掛けて、更にポノの顔面に向けても同
じく唾液を吐き掛けました。

ポノはマルタ生れであります。マルタ生れの人は短氣なので有名であり
ます。よしマルタ生れでなくても、顔面に唾液を吐き掛けられて黙つて居
るものはありません。乃で、ポノは赫つと怒つて、短銃を取り出さんとし
ますと、俄に附いてゐた通辯人が「お待ちなさい、唾液吐きは此の地では

人を尊敬する風習で、王の唾液を頂くのは非凡の光榮としてあります。」と申しましたから、ポノはビストルだけはよしました。如何にも忌々しいと思ひまして、ハーツと云つて、口に一杯青痰を溜めて、それをバツと王の顔面の真中目掛けて吐き掛けますと、狙ひ違はず、鼻先を中心に、その周囲一面にかゝりました。

しますと王は、面を盛めて、ウームと唸りましたが、しかし大々的のお満足、通辯に向つて、此の外國人は大に理解する男だ、象牙の取引は勝手次第と言つて遣れと申しました。

(三四) 手眞似學の大先生

手眞似の學問は大學の課目にしてよい

昔スコットランド國に派遣されてゐたスペイン國の大使に、博學多識であるばかりか、啞のやうに手眞似のみで談話をすることに大自慢の人がありました。そして其の説では、手眞似は人に取つて大層大切なものであるから、何處の大學校にも、此の學問を教へる専門の先生があつてもよいくらゐだといふのでありました。

さて此の手眞似大使が或る日天機伺ひとして、王宮に参りまして、王に拜謁しますと、王は一通り御挨拶の後冗談半分に「豫て聞いてゐる噂に、卿は手眞似談話が大層巧であるといふことだが、余が臣下にもさういふ者がある。それは現にアバテイン大學に手眞似學の教員をしてゐる。而も其の事では可なり有名である。」と申されました。

大使は此の王の言を聞きまして、さては自分の豫ての主張通りに、此の

國には手眞似學の先生が居るか、と大に喜びまして、「何より嬉しい言を拜聴いたします。アバデインは近所の事、明日は早速其の先生に會ひに参りして、手眞似談話の試合をいたして見ませう。」と、お答へしまして王宮を下りました。

一夜造りの手眞似學の大先生

是に於て王は大に驚かれました。王がちよつと冗談に申されたのを眞に受けて、大使は會つて試合をしようと申しましたから、王は急に使者を以て、アバデイン大學に、明日はしかくのわけで斯やうな者が参るから、然るべきものを手眞似學の教員に仕立て、首尾能その場をつくるひおけと申しておやりになりました。

大學では突然の思ひ掛けない王命で、一時は大に狼狽いたしました。これにそむくわけにも参りませぬから、先生方が、鳩首相談の結果、片目で且容貌こそ醜いのですが、極めて面白い瓢輕者との噂あるグラスカルと申す、牛殺を商賣にしてゐる者に、狂言をさせることに一決しまして、これをその者に申し入れますと、その者も、多分の御褒美を頂くと聞いて、快くこれを承諾しました。

手眞似の試合

グラスカルは當日になりました。髪を刈り、髯を剃り、立派な大學先生の禮服を着けて、大講堂の眞中に傲然と控へてゐますと、廳で大使は案内に導かれて堂内に入つて、片目のいはゆる手眞似學の先生の側に行つて一禮

しました。しますと、先生も亦立つて一禮しましたから、乃ち大使は一本の指を出しますと、先生は二本の指を出しました。それから大使は更に三本の指を出しますと、先生は拳を固めて大使の鼻先に突き付けました。しますと大使は微笑ながら、隠しから一個の蜜柑を取り出しまして、それを先生に見せました。しますと、先生も隠しから一片の麵包を出しまして、之を嚙み下だす真似をしました。こゝで大使は大満足の體で、先生に極めて丁寧なお辭儀をして、堂を退り出しました。

大使の説 明

此の時まで、狂言如何にと、心配顔で次ぎの室に控へておりました大勢の先生方は早速大使を引き入れまして、結果は如何でございましたと尋ねま

すと、大使は欣喜の顔をしまして、次ぎのやうに物語りました。

「手眞似大先生の意外に偉いには驚きました。先生のやうな傑物は、お國の寶であるばかりか、世界の寶でせう。先生との手眞似の間答は斯うでありました。先づ私が天の神様は御一名しかないといふ意で、一本の指を出しますと、先生は忽ち二本の指を出しました。是れは、申すまでもなく、天の神様の外に、そのお子の基督様が御出になるといふ意に違ひありません。乃で私はさういふ風に勘定するなら、外に基督の母上の聖マリヤ様も、お出になるといふ意で、三本の指を出しますと、先生今度は手を拳に丸めてお出しになりました。是れは基督教の三位一體、すなはち神は三體になつてゐても、本は一體の天の神様のみであるといふことを示されたものに違ひありません。乃で私は神様は有り難いもの、

吾々人間に斯ういふ美味い果物まで授けて下さると、先生に蜜柑一個を見せますと、先生は私に麵麩を見せて、人間の生活に最も必要なものは果物ではなく、是れだと言はぬばかりに、その麵包を食べる真似をされました。先生は實に豪い大學者です。ほと／＼感服しました。

一夜先生の説明

大使が大學を辭し去りましてから、今度は、先生方がグラスカルを呼び寄せまして、其の言ふ所を聞きますと、大使の判断とは、丸で違つたことを申しました。それは即ち次ぎの通りでありました。

皆さん、まあお聞きなさい。あの大使ほど、世に無禮な人間はないかと思ひます。何故と申しますに、彼れは私を非常に愚弄しましたからで

す。私は實に残念で堪りませぬ。其の理由は斯うです。先づ彼れは一本の指を出しました。これは私が片目ですから、目が一つしかないといふことに相違ありません。私はあまり忌々しいので、目は一つでも、立派に二つの役目をして居ると、指を二本出しますと、彼れは更に指を三本出しました。是れは役目は二目と同じでも、目その物は、二人のを合せて、矢張三つしかないといふ意と取りました。それで此奴酷いことを言ふと、一本お見舞ひ申すぞと、拳を固めて、向ふの鼻先に突き附けますと、彼れはニヤ／＼笑つて蜜柑を出して、貴様の國のやうな瘠地には、斯ういふ美味しい物は出来まいと云はぬばかりの振をしましたから愈私も怫然として、そんな物はどうでもよい、吾が國には麵麩といふ食物中一等大切なものが出来ると、その麵麩を見せてやりました。します